

特 12

126

古今  
實錄  
名鎗世野權三郎實記  
全



091476-000-4

特12-126

名鎗世野權三郎實記

榮泉堂

M19

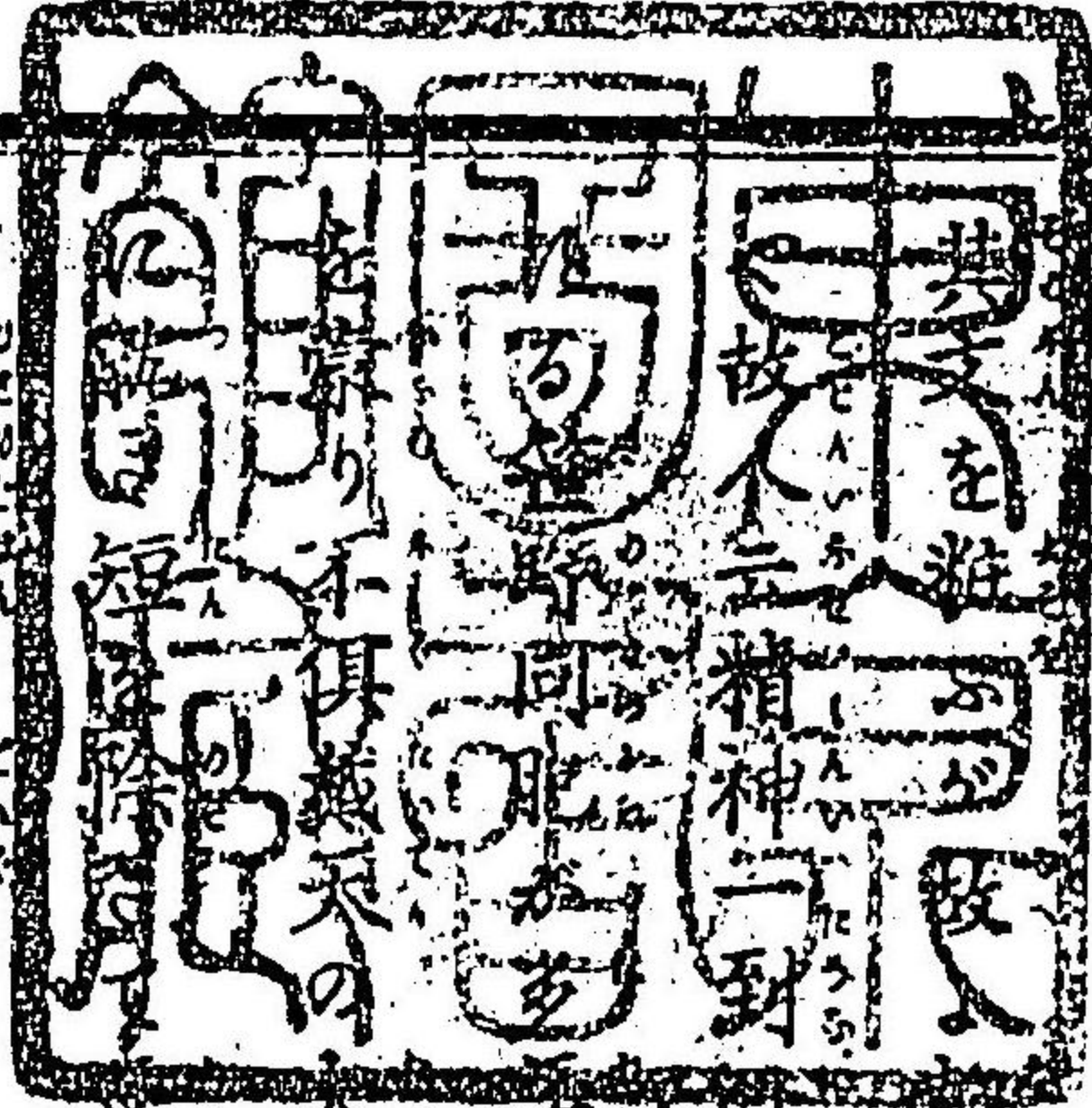
DBN-2445





九年十一月二日以内務省文書 1378

今古 實録 名鎗笹野權三郎實記序



復讐の舉古より鮮いとせむ然も共編者多く無根の説を附會して徒に  
其を遊ぶが故に精神一到行事不成と今昔も寛永の頃より久しく人口も膾炙  
を蒙り不傳燕天の大義を遂げし顛末をものまると臨み勉めて虚を去り實  
をとり一冊完備の便利よく讀者諸君の高評は仰がんと  
と獨自慢の天狗よく拙き筆を捻りつゝ茲に一語を吐露して聊序辭を換ゆ  
ると云爾

明治十九年五月

榮泉堂主人誌







名鎗笹野實記目録

○將軍家大久保彦左衛門殿諫言の事しやうぐんけいへくほひこぞ 彦 ほんどのかんげん并高田又兵衛鎗術精妙の事たかた またべ 彦 さうじつせいめう

○笹野權三郎義胤生立の事さのの こん 大したねをひたさ 并武術丹練の事まじかつたんれん

○笹野權三郎種田五郎左衛門議論事さのの こん たねだ ぎよ ほんごろうんの并權三郎紀野川堤よて危難の事まの の かはづ、み 危なん

○義胤紀州和歌山を立退事大したねき しうわか やま たのの 并備前岡山へ行事びぜんをかせや かく

○犬上三四郎佐原重兵衛を毒殺の事いぬがみ さほらがらうゑ 毒つさつ并權三郎佐原の死去しせよ以間岡山へ歸事まゝかやま へる

○權三郎佐原の讐を報むる事こん さのの せう あた せう 并權三郎乙丸の後見と成る事こん せうまる こうけん なる

○義胤岡山を立退く事大したねをかやま たのの 并山道に踏迷ふ事やまみち つかまふ

○權三郎拂々を仕留る事こん びび、 しとめ 并佐布里左内さぶりさないに逢ふ事あふ

○義胤播州上月ふ到る事大したねばんしう かづづき いた 并仲間奉行をむる事ちうげんばうこう

○長谷川兄弟不覺の事はせがわ はせやうだいふかく 并新八郎若黨しんぱちやう 若たう愛助を計る事あいすけ しか

○權平長谷川兄弟を討事こんへいはせがわ はせやうだい うち 并佐布里左内さぶりさない歸參の事きさん

○權三郎上月を立退く事こん かづづき たのの 并妹お梅いも おうめに巡り逢ふ事めぐりあふ

○お梅國元の變事を語る事おめくにもと へんじ こと 并兄弟報讐首途の事あやうだい 報せうしゆと

○笹野權三郎倉澤に三危難の事さのの こん くらさわ にさん 危なん 并三島みしまふて町人ちやうじんと助る事たすく

○義胤江戸表へ来る事大したねえど 表へきて 并紀州家の上屋形へ到る事きしうけ 上みやがた いた

○權三郎敵の在家を聞く事こん かの かりか 并敵種田かたまたねだを取逃とりながる事

○義胤再度大坂へ赴く事大したねさいと 大坂へ 赴く 并播磨灘はりま 灘よて海賊退治の事かいぞくたいぢ



○室津ふて笠野同胞再會の事

并同胞九州渡海高田又兵衛對面の事

○權三郎種田が奸計に陥る事

并高田宮本義胤を救ふ事

○權三郎敵種田を討事

并笠野家再興の事

名鎗笠野實記目錄終

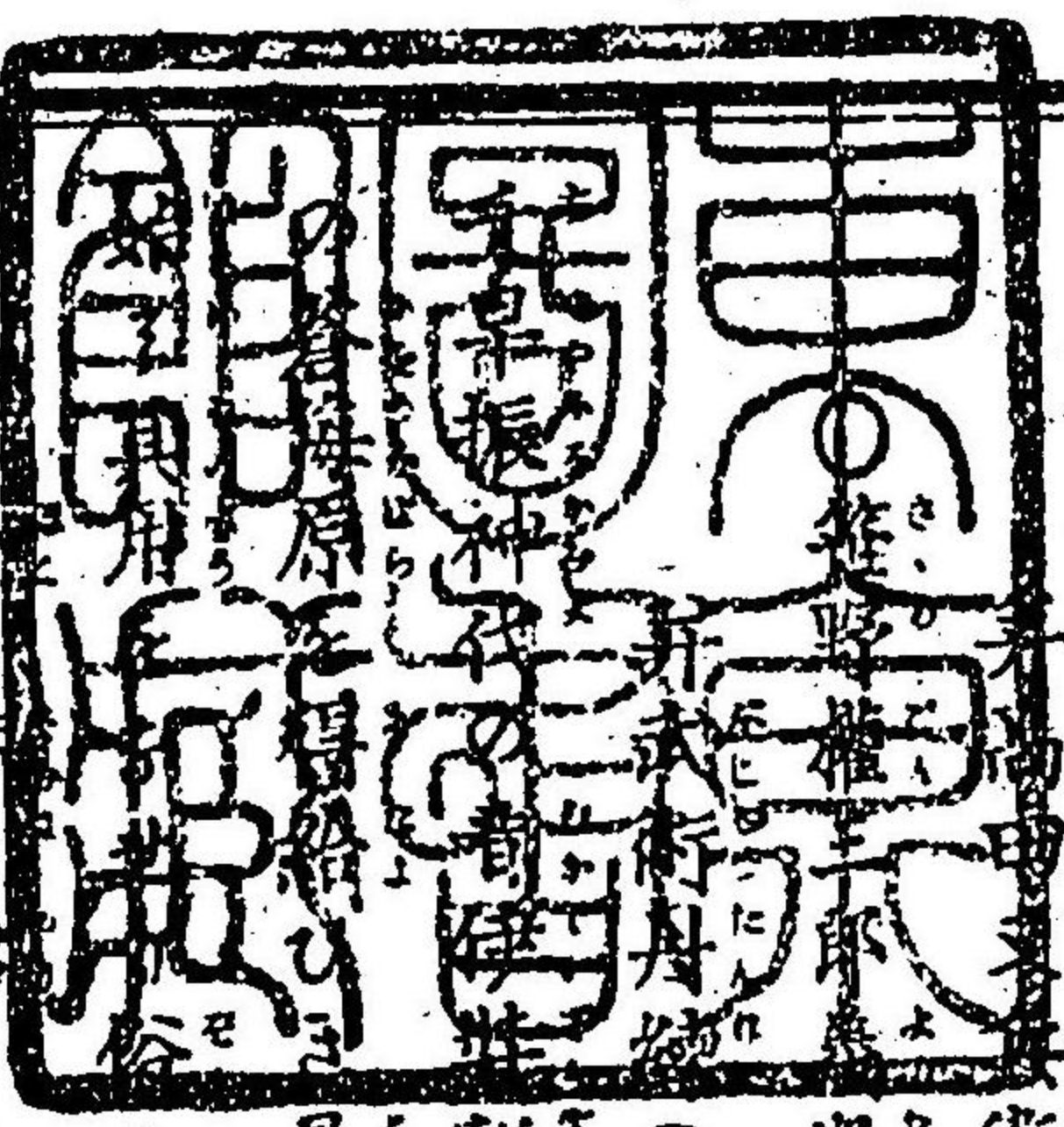
持 12  
126

名鎗笠野權三郎實記

○將軍家へ大久保彦左衛門諫言の事

術鎗術精妙の事

胤生立の事



の事

伊弉册尊天の浮橋に立給ひ天の瓊矛以て探り一  
是を日凝島と名号給へり然ば諸の武器多たが中より  
不鎗の往古なきものと云へど是矛の往古あるを  
近き昔の事を是を使ひ始めに楠正成の家人天野了眼と云る者なり  
其後鎗術母名を得一人多しと雖も殊に其術の妙を極を孝義万人の上に出  
し笠野權三郎義胤の履歴は尋るべし頃寛永年中時の武將に從一位左大臣



源家光公徳川三代の將軍と申奉つり武藏國江戸に於て天下の政と與  
 りいろしめし四海昌平万民鼓腹の樂をふし干戈の患を忘れし事茲に十有  
 餘年公萬機の暇よの暮將恭香茶の湯の會或は酒食の宴は金銀と費し給ひ  
 奢侈日を追て甚だしかりければ忠臣眉を蹙く諫言奉つれど斯むりの事  
 をと聞入給えを當時三代の君に奉仕剛直よして智勇逞しき大久保彦左衛  
 門忠教殿一日御前母伺候さき將恭の御相手仕つらんと進み出局上駒の立  
 様小擬へて治世母亂気志きを武備御心を盡さき御遊樂を止り給へか  
 と理を盡して諫奉つりし母此公元承聰明英智ふ在ませば忽ち先非を悔給  
 ひ御行ひを正されたり此公寛永五年の事とる刀劍御師範役たる柳生但馬  
 守殿を召れ當時我朝よの劍道の隨一の其方あらんが鎗術の何者なるかと  
 上意有ければさん以鎗を把て二と下らぬの南都寶藏院樂傳法印の高弟母  
 て播州明石の城主小笠原右近將監忠真母仕へ以高田又兵衛吉次と申者よ





いんと言上か一ければ早速は又兵衛を江戸へ召下され御城中吹上の御庭に於て鎗術に上覧在ませし因て高田吉次の一世の曠と同道の士觀興寺七兵衛元勝を相手となし鎗の法式を上覧入々れども折角の御召目目前精妙の術を顯さるる本意を以て鳥籠に養ひ置れし雀を御庭に放ち那を仕留よとの上意に畏まり奉つるとして三尺餘り立上る所を高田の直と鎗先を差向し其氣相の呼吸の術著るしく雀の羽を縮め地上へ落としたりけり然ば將軍家母の御感料ならず日本一くどの御賞詞は高田のいとゞ面目を施し主人迄の高名なりと拜領の品々を頂戴おし主家乃屋敷より取らば此事徳川家の御一族たる紀伊大納言殿の御聴お達し高田方へ使者を遣はさき吉次國元へ歸るの序大儀ながら和歌山へ立寄兵よ此儀頼と存するとの仰は又兵衛長まり其後將軍家の御暇給り江戸表よりの歸り掛和歌山へ無事お着き御長屋より三日の間休足しく後大納言殿の御前母

出しに鎗術の事御尋ふ隨ひ先法式を御覧入夫より水月戸入の傳を始めとし玄妙不可思議の興旨を惜まむ微細に説盡を其辯舌水の流るゝが如くおれば大納言殿の深く感れ且悦ばれ御前よ於て酒肴を給えり然ば吉次の上々の首尾よて退出せしが此時案内せし近習の士は向ひ今日列座の面々達數多御座以中は年齢十五六歳にして雪折笠の紋付着たる少年あり彼人乃姓名の何と申され以哉と問ば近習の士の打合點渠の當家より寶藏院鎗の指南役笹野權太夫の一子權三郎義胤と申者ありと聞て高田の儲おそと思ふ顔色よて然いゝ運留中彼人御開眼の砌其方へ御立寄願ひ度此旨先禮おがら權三郎殿へ御傳言下さるべしと云ば近習の承知おし後權三郎へ告げるは笹野の甚く打喜び幸ひ今宵は非番なり率尋ねんと又兵衛の旅宿へ行く客間を通り端然として主人を待其体威有く猛うらむ美服とて飾らねど顔色玉は欺き女母も稀なる容色よて愛敬の露の灑るゝはか



是なるが内母の勇氣を合て眼に一毛の微みなく斯る處へ右手の襖を開く  
 と等く高田又兵衛物成も言す十文字の稽古鎗を權三郎の頭上へ突掛たる  
 其疾き事電光の如くあるを權三郎は疾くも身を避て座を崩さるる四五尺  
 飛退き扇を把て受流を練母感じ又兵衛の鎗を捨て一禮し只今の失禮免  
 し給へ今日殿の御前罷出小性衆數多の其中貴所の身の構へ扇の把  
 様眼の配りとも凡者と思えれ且我兄弟子笹野權頭正胤主の面体は能  
 く似させ給へば頻に懐しく存じ御招き申一手試み申たる失敬の働きも武  
 門の常と咎給ふも備も貴所の權頭殿の由縁の人かと尋ぬれば權三郎は兩  
 眼より涙を破落々と流し誠母正胤は我賢父にて兄弟子と仰あまは委細  
 御存じふもいんが父正胤は寶藏院の高弟あり一仔細有て師の勘氣を  
 請是非なく諸國に修行なす中豊臣秀頼公の御招きにて因て師範となり知行  
 三千石を下賜り先斗關東と御合戦の砌天王寺口にて花々敷血戦して討

死せしと聞しのみ今父と稱する權太夫は元賢父の家来母で中瀬を以て姓  
 とおす者父の最期迄傍邊に在て正宗の刀二字國俊の短刀寶藏院鎗術の傳  
 書八重垣流小太刀の傳書此四品の遺物を預り幼年の其しを抱へて立退暫  
 く浪人の身ふ在しが武術拔群なるを以て御當家へ召抱へら其某を假し子  
 と稱し是までの養育誠に産の父に劣らぬ其も父の家を興さんと教るも厭  
 らぬ學ぶも倦む聊々刀鎗の法を行ひたるのみ珍客へ對し最恥しく以然し  
 らも賢父の義兄弟と承まはせば父母逢たる心地して他人と思はれむと  
 涙を押へて物語る母吉次も思わす袖を濡しつゝ貴殿權頭殿の御子息と承  
 まえれば一入嬉數存むるあり未だ御若年の小腕ながら其術に秀られしは  
 一見しく能知たり此上とも尚怠らぬ修練有は二十五歳の曉さふ凡天  
 下は敵をからん但慢心を生むる時身を亡きに至るも知を只慎む如く  
 なし我義兄の子息と思へば我甥も等し差出たる異見惡しとな思ひ給ひ



かと昔一正胤引立られし事どもと語り出し恩報一の爲なりとて合氣の  
 術を傳授おし其夜の種々饗應て權三郎を返し遣日を経て高田の播州明石  
 へ歸りけり是より權三郎の一倍心を勵して刀鎗の術を練磨する事片時も  
 怠らぬ毎夜人の眠るを待寝に屋敷より程遠らぬ城山に祭たる尾形之神  
 靈の社あり其社頭參詣し武名を高くせん事を願ひ後の林に於て獨鎗小  
 太刀の修行に心を入れ治承の昔牛若丸が鞍馬山僧正谷ふく兵法自得の丹  
 精も斯やと思ひやられたり父權太夫始めの程の心も付ざりしが後々の  
 怪み後を尾行其有様を見て感涙を流し驚嘆しとりしが十五十六僅二年の  
 修行ふて一家中及ぶ者有まじと思ふ程をなりよけり此程權太夫の年老  
 病勝りて出仕の日多からぬを權三郎の一日も怠らぬ殊に美少年と云才智  
 勝れたれば主君の寵愛限りなく同僚は妬む者も少なからずとかん

○笠野權三郎種田五郎左衛門議論の事

并權三郎紀野川堤にて危難の事

○義胤紀州和歌山を立退く事

并備前岡山へ行事

時寛永七年三月三日上巳の佳節ありとて家臣等御祝酒を頂戴し各々興  
 を添る餘り頃日流行の骨牌合を始めたり（此骨牌合と云は歌骨牌の如く  
 小さき札を和漢高名の武者が畫き和の金色漢の銀色の裏を貼しあり是は  
 座上に數十枚並べ數人左右に別れて金と銀とを取分け其畫を競べ武内宿  
 禰太公望おと相應きと合するあり斯の如く其能く對するを取時の其日の  
 判者儒者軍學者と兩人有て彼人物の甲乙を評論し座中の衆議及ぶ是只  
 徒然を慰むる遊び事の様なれど其實に軍學を講究するの大益ありとて御  
 前より屢々催し有けるとかん）儲も交るく骨牌を數番合せしが爰も種  
 田流鎗術の指南番をお種田五郎左衛門長利と云るに其役は誇る強氣の



武士あり此日關羽を取と辨慶は合せ遂に長道具の論ふあり常ふ我得たる  
 素鎗の長きと誇り是は勝る利益おしと云張つ、小太刀の用は立をなど罵  
 りけるを權三郎は傍らに在て冷笑ひ居たりしかを種田は見咎を若輩の其  
 許などが知所は非を論有を聞んと云慕りしは權三郎は答へ答る様關羽が  
 八十二斤の青龍刀おど利の成やど有べきが夫を用ふる程の力おくては使  
 ひ難いとて小太刀の早技お利多きを唱へ賢父正胤の鍛練せし八重垣流小  
 太刀の意味を演けまは種田はグツと閉口せしが負惜き強き白痴おまは論  
 より證據ありいざ御前に於て長短の術を競べんと此段御前へ願ひ御免許  
 状得たるおより權三郎は九尺の鎧鎗種田は三間の素鎗を以て立會へば廣  
 言も似お忽ち種田は權三郎の爲は突伏られ其座も堪らぬ急病の旨を  
 披露して退出を權三郎は面目を施し々れど少しも誇らず殿より御酒を賜  
 り夜は入る御前を退き中間一人お提灯を持せ我家を指て歸りけり儲も今

日種田が試合は望しむ權三郎が出頭を妬き突伏て恥を與んと思ひしお却  
 て己が負となりたるは自業自得と云ものあるに種田の門弟等は是を聞いて  
 無念と思ひ血氣の若者五六人云合せ今宵權三郎が下城を待受敷討し成ん  
 と紀野川堤の茂きへ隠れ今や、と待處お權三郎は微醉おて紀野川堤へ  
 差掛るし左手の闇を叢より曲者五六人物をも云を鎗を扼いて突掛まは權  
 三郎此の理不盡なりと思へども是非を問問もなく父が紀念の正宗を抜よ  
 り疾く曲者の手元へ閃然と踊り込まず進みし二人の諸脛切放し續いて  
 来るを斜に拂ひ或は梨割車切矢庭は四五人切伏たり残りし二人は是は見  
 て叶えし者とお思ひけん跡闇まいて逃失しかを頓て權三郎は悠々と刀を  
 鞘に納め我家へ歸り翌朝養父權大夫より此由目附へ訴へけるよど役人立  
 會く死骸を檢視るお皆是種田が門弟にして用人番頭おどの次男三男又の  
 厄介の者などおれば種田は彌々恥のかき上なりとて其夜逐電せしお系權



三郎の切徳とあるのみ、御前の首尾益々宜けきと切きし者の父兄より重  
 役の人もあれは、權三郎が後の爲に如何なる禍ひもあらんかと、權大夫の勤  
 當の届をなし其夜權三郎を呼此度の一件重役の子息もあるに、より後日御  
 身の爲にも惡かりおん是に因て今日勘當の届をし、とり然おても身を慎み  
 心を責て四五半の間諸國修行致はべしと、教訓をき母權三郎の流る、涙袖  
 もて拂ひ、誠ふ是迄御養育の御恩勿々言葉ふ盡し難し、斯なる上は仰は隨ひ  
 是より出、國仕つるべしとて、義理ある妹お梅お後々父の看病を頼むなり  
 と住馴し和歌山と後まなし和歌の浦より金毘羅船へ乗込夫より備前國岡  
 山に到りぬ、茲に佐原重兵衛正列と云、鎗術母達せし武士あり是に登野權頭  
 の高弟ありしが、權頭討死の頃の重病、母懼て最期に逢む大坂落城の後諸  
 所を遍歴し、當時備前岡山の城下は住り佐原の屋敷に尋ね行て見れば七八  
 間の道場を構へ内より大勢の門弟等が、稽古の音喧ひしく、表札亦佐原重兵

衛と書付たるを見て、玄關より案内を乞、姓名を通じければ、取次の侍士立出  
 先々此方へ御通り在べしと、客間へ通じ暫く相待處お重兵衛立出、互母一禮  
 相濟し、後佐原の涙を浮め、今貴所を見て亡師お謁見する心地せりとて、待遇疎  
 意おかりければ、是より權三郎の急がぬ旅故、茲に食客とあり代稽古おじな  
 るお師おも勝るゝとの沙汰あり、此重兵衛より乙丸と云る小兒ありて、妻何  
 其近來病死しければ、或人の媒合よりお雪と云ふ婦人を、後妻に迎へし、母重  
 兵衛の五十餘歳お雪は二十六七歳より、然も艶色、嬋妍婀娜たき、似合しか  
 らぬ夫婦すと譏る者も多かりし、殊にお雪は多情ふして、何時の程より權三  
 郎が、いまだ十八歳の美少年は想を焦し折あらばと、伺ひ居たる中、霜月上旬  
 初雪降て、最寒お夜重兵衛は泊番まで日暮より家にお雪の斯る首尾を  
 そ多く、有まると此の酒肴と調へ、權三郎を我部屋へ招き、今宵は初雪の爲  
 殊お寒さ強きばと、く待遇つ微酔の眼元お十分の色気含みて、おあだれを



頻りに嬖りがまじき体及びしうに權三郎の呆れつゝ且怒り其不義を  
 諫めて異見を加へしよどお雪の大きい恥たる面色なりしが心の中と思ふ  
 様備々見りけにやらぬ賢識もある者哉と百日の戀も一時に醒果腹の立ど  
 も顔に出さず只是御身の心と引見たる戯れあれば後必ず口外御無用なり  
 と云和め最本意なくぞ立別きける備もお雪の熱々考ふるふ此事他人に知  
 れるに恥の上の恥なり先を時の人を制し後るゝ時の人を制せらるゝ是  
 より夫重兵衛は讒言は構へて彼人若氣といふ云ながら君の目状忍び折節の  
 妾を口説事などありと云ふせば彼市小虎を出はの譬の如く重兵衛も半の  
 信に待遇始の如くは非れば權三郎は是等の氣色を敏くも悟り一先此處を  
 立去る母の如くと思案を極私儀豫て武術修行の爲國々を遍歴せん心得  
 ふて國元を立出し處先生の御厚情は預り長々御厄分に相成一段御禮言葉  
 ふ盡し難く今般御暇を賜り石見美作邊を遊歴致度いと詳細に書記一置佐

原の家を立去り茲に肥後國熊本の浪人母て犬上三四郎と云者元山本無  
 邊流の鎗術を稽古なしたるが此程佐原の内弟子とありける處元米坂智  
 長一者よ師の機嫌を取萬事一慣たる男なれば權三郎も劣る目と懸  
 遣りける程お雪は又々此三四郎母無想せしお犬上の犬も劣る義理知  
 らむなき人知れを互に奸通り只其好隙おきを患ひしが又も重兵衛泊番  
 の日暮方より雪降出たり妨げなる仲間五助に鼻薬を與へて酒を吞せしお  
 元米此五助の食事ふ代ても好む故一并餘りの酒を吞前後も知を寐入ける  
 をお雪の見濟し最早是にて妨げおしと夫より犬上を己が閨へぞ忍むせけ  
 る

○犬上三四郎佐原重共術を毒殺の事

并權三郎佐原の死去を聞岡山へ歸る事

天の作る禍の避べし自ら作る孽の適難しと茲に佐原が妻のお雪の犬



齊した夫上を聞し忍むせ兩人とも身の邪まの小夜衣我夫ならぬ禱重ね怪  
 しき夢をぞ結びたる然るに仲間五助の不計眼を覺し咽喉乾くがまゝ、丹水  
 を呑んと勝手へ到りし、奥の間にて男女の話辭をるゆゑ今宵の寒さ、先  
 生の御歸り母やと何心なく奥へ行か雪の闇を差覗く、豈計らん犬上のお  
 雪と枕と双べ居さりかば是はと驚き駈出すと犬上も驚きおがり刎起て  
 五助を捕へ此事万一他言せば一大事あり生じて置難しと刀の柄お手を懸  
 るよ五助は活たる心地なく椽頬を平伏今宵の事決して口外致まじと  
 ば何卒命を御助々下されよと両手を合せ震へ居るを見まお雪は惘然と  
 思ひ此の金子を興へて固く口止し其夜の無事な濟せしが或日本夫重兵衛  
 何時より疾く御前を退きて我家へ歸り殊に寒さの強けき、寒氣交ぎよと  
 て大い丹酒を飲て臥たる處其夜俄に夥しく吐血し、醫師の藥を驗かく  
 忽ち黄泉の客とぞなりたりける嗚呼歎むべし備前岡山一家中の師範役佐

原重兵衛程の英雄も今茲夫淫婦の毒手よか、り敢果なき最期を遂たるに  
 天とや云ん命とや云ん借もお雪は甚く悲しみたる体よて犬上と俱に後の  
 事ども取贖ひ柳町の光禪寺に埋葬し七々日の法事を怠らむ營みけり夫よ  
 り犬上の幼兒丸の後見となりて今に誰憚る者もなく彌々お雪と禰を俱  
 よし公然と淫樂を恣ま、よどおし居たる又門人中も平生師乃大酒を憂へ  
 殊に老年よして年若き妻と迎へ斯ては長命覺束か、と皆々危踏しが果し  
 る内損し給ひぬと一同嘆息をいゝたり然ども其實は犬上の惡計よより大  
 酒よ乘じて毒害せしと誰一人悟る者あらざりしは是非もなき事共なり斯  
 て寛永八年二月笠野權三郎の美作國津山に到り先旅籠屋善兵衛方へ一宿  
 じ手代試呼此城下よて劔術を指南致を人おらば教下されよと尋ねけれむ  
 手代は心得此城内は宮本流の指南番をさる、鷲尾一心齋と中人有り餘程  
 の名人よて門弟も四百人餘ありとの事と語るを聞て權三郎は打撃び厚く



禮を陳て翌朝鷲尾の屋敷へ尋ね行先案内を乞けし内弟子体の者出采り  
 何方より御出りしや御姓名承てきたしといふ其の紀州和歌山の藩士笠  
 野權三郎義胤と申修行の爲遊歴致し者なるか先生の御高名を承りし故意  
 推參仕つりては何卒先生御目に懸りたし此段御執次下さるべしと演  
 るに彼若侍士與へ行一心齋と斯と告ぐる小鷲尾聞て首を傾け暫時思案の  
 体ありしが礎と膝を打紀州の笠野氏とあらば權大夫乃一家成ん何母もせ  
 よ客間へ通まべしとの差圖母隨ひ權三郎は客間へ通し頗る鷲尾は出て對  
 面せし顔の色は雪よりも白く眼中清み母して一毛の弛み威有て猛か  
 らむ實に無類なる若者なれば一心齋初對面の禮畢りし時紀州和歌山より其  
 し知人あり中瀬權太夫と云當今氏を笠野と改めらまじ由反し承りし  
 貴所は權太夫殿の由縁の人よしやと問む權三郎は頭を下さんし權太夫は  
 私し養父よしとは是より賢父權頭が事又此度仔細有く武者修行に出し後佐

原重兵衛方は食客となりし始末ども落もなく物語り々々を一心齋の太に  
 感じ夫より其術を試みしに四百人の門弟子一人も及ぶ者なく權三郎は數  
 多の門弟子も敬われし故茲に居るといふに半年餘り逗留なしければ佐  
 原の安否も心元なれまゝ一通の書面を認免佐原の門弟子青田左内(岡山藩  
 中母て勘定方を務む)といひ日米入魂なるより同人の名宛母して差立たる  
 此青田左内と云人の仁義篤實の君子にして暇も武道に精く權三郎の生質  
 と愛し其行方を尋ね今日も尊をかし居たりし折飛脚体の者青田様は此方  
 にや作州津山より手紙届は御受取下さるべしと差出を夫れく太儀を  
 りと受取て上書を見まむ青田左内様笠野義胤と有る飛立むりり打歡び  
 急ぎ開封して讀下す其文は曰く  
 一筆奉啓上は殘暑嚴敷は所彌々御安泰ふ被爲入恐惶至極奉存以隨而  
 私儀尊地帶留中の諸事御厚志し預り千万難有奉存以豫て旅行前御禮旁



々御暇可申上處少々仔細有之其儀母不及以段平に御仁免可被下置以將  
又其後佐原先生の安否心元なく以に付御様子相伺以尤も私儀遊歴修行  
の身母以へむ居所も不定ながら當時に作州津山家中鷲尾一心齋方罷  
在以先右時候伺ひ度此如ふ御座以餘に期拜願之時以恐惶謹言

寛永八年七月日

權三郎義胤

青田佐内様

青田の是を繰返し見て借も笠野の作州津山に在留を以か佐原の死去を知  
せむ早速當所へ来るべしと直様返翰を認め作州津山ある鷲尾方へ届け  
るに權三郎の名宛おれば笠野へ是を渡したるを義胤に取手遅しと披見  
るふ其返書母曰く

貴書悉く令拜讀以如來命殘暑未退以へ共愈御清健之由大慶不過之以  
次は拙家無異に罷在に間御安堵可被下以扱佐原先生事當三月中旬頃大

酒後急病差發り吐血一ニ升母及死去被致殘念至極母御座以尤も先生存  
生の中肥後熊本浪人母て山本流とを修行以犬上三四郎と申者米當今  
て此後見と号し罷在由此事に付甚だ心元なき風説も有之哉お相聞え以  
得共其後公用に寸暇なく右等の次第御通達も不及以遠路の旅行御太  
儀ながら其中當地へ御歸着に相成以む拙宅へ御米駕願度奉待り以先  
に急便此段不盡意餘に御面談之上万々可申陳以恐々不備

寛永八年七月日

青田佐内

笠野權三郎様

笠野義胤の是を見く天を仰て長嘆し悼しい哉佐原先生の死去よ青田氏の  
書状に甚だ怪むべき意味有む此に彼の淫婦の毒計お中へ給ひしも計り難  
し何れ免も有れ岡山へ立越ばやと此旨を鷲尾に明し暇を告て岡山へと急  
ぎけり頃ハ八月上旬にして稍秋風立初て涼しかりければ道中思ひの外抄



取頭て岡山へ着先深編笠ふ面体を隠し青田左内の屋敷に到り一列以采  
 の挨拶を演などしければ青田は是より佐原の死去の様子且お雪犬上等の  
 振舞怪敷風聞有る由語る中日も夕陽になりしま、權三郎は青田お暇と告  
 げより今歸りし体に持成し佐原方へ致りし母お雪は權三郎を見て遠く  
 駈出是は、笠野様能も御歸り下されしぞ當春貴公が御他行成れしより  
 程もかく某月某日先生の吐血してお死なされしと仰山に大聲立ち泣けれ  
 ど涙は然程出もやらぬを權三郎は先其後の一禮を述私事作州津山并罷  
 在先生の御死去の由承りれども實否の程相分らむ一先御當地へ立越以  
 り、分明からんと夜と日、纏て道中伏急ぎ今日只今到着仕つれり然る  
 舟彌々御死去在せられしと、皆々歎の敷次第なり私し長々先生の御厚恩  
 を請末期の御看病も仕つらむ返々も残念の至り切て、御佛前にて御詫申  
 上たしと、興は通り犬土ふも面會し後々の取贖ひ黥々御心遣ひの事なら

んど挨拶し頭て佛前、燈明を照し水を手向香と焚替し佛名を唱へ居たる  
 中お雪は酒食を調へ權三郎は勸進共義胤は頭を振り私し事少々氣分悪く  
 胸塞り湯水ど咽へ下らむ私もお構なく皆様御休下さるべし拙者は今晚  
 是より通夜致し明朝御目懸らんと只一人佛前、座を占て家の様子を窺  
 ひける、犬上三四郎は内弟子ながら内外の事を心任せ、取計ふ様子万事  
 不審の事多ければ權三郎は彌々怪しむ夜の更るを待居ける

○權三郎佐原の讐を報むる事

并權三郎乙丸の後見とある事

○義胤岡山を立退事

并山道ふ踏迷ふ事

爾程は孝義勇敢万人に勝れざる笠野權三郎義胤は佛前、籠りし中夜に漸  
 次、更行て家内の者も寝静て聞ゆるもの、虫の聲のともり權三郎は心中



一佐原の法號を唱へ若惡人乃奸計にて非命の死を遂給ひしからむ明りよ  
 某へ告給へと一心不亂ふ念をるふ不思議あるうふ香の煙りの中より佐  
 原の亡靈忽然と顯れたる体髪のおどろふ振亂し全身血ふ染みて眼を瞋ら  
 し拳を握り然も残念の様子見えし誠以身の毛も彌立ばかりなり權三  
 郎の身を起し斯怪き姿を現さる、上の淫婦姦夫の毒計を相違あり我恩儀  
 の爲に讐と討生前の恨を晴させ申さんと夜の明るを待たがら一ツの計略  
 を案じ出し元來家内の勝手は知たれば仲間部屋に到り五助くと呼ける  
 一五助の眼を覺し誰方様やと戸を明けと闇みて顔の分らざき透し見る  
 を我の笠野權三郎あるが長々其許の世話ふ成し故少し計りの土産も遣し  
 度所持致したきと今爰にての出し蕪る母より夜の明なむ人ふ知せと柳町  
 の料理屋柳屋まで出向共某し一尾先へ参りて待受る故必むく米る  
 べしと云置夜明と待て柳町の柳屋へ赴きつ、權三郎の亭主に向ひ早朝よ

り些氣の毒あれど酒肴を三種ばかり外は飯を二人前成丈急いで頼むあり  
 尤も跡より仲間一人某しを尋来らんより直に通し下されと頼み置て與  
 座敷へ打通り五助の米るを待居たり暫く有て仲間五助の莞爾々々面みて  
 柳屋の門口に立此方へ笠野様御入かと問々れば先程より御待候先々御上  
 り成るべしと笠野が座敷へ案内し酒肴を持出る母權三郎は五助の盃盞を  
 さし何も馳走のなけれども遠慮なく澤山お呑まよと肴を把く遣りなとし  
 頃て懐中より小粒ニツ三ツ出し紙お包み五助の前へ置是れ甚だ異な物  
 なれど聊か土産の験までなり鼻紙でも買るべしと云は五助の悦び斯に  
 存じ寄ぬ御土産何より實ふ有難き賜辭退け却て恐れ頂戴仕つると押戴け  
 ば權三郎は微笑時貴様へ折入尋問たれ事ありと皆まで云ぬ母五助の  
 合點其御尋の先生の死去の事なるべし其儀あらば御尋なく共御話し申さ  
 んと思ひおしりと是より佐原の存生中よりお雪三四郎が姦通せし事酒よ



毒を入吞せし事光禪寺の和尚より五十兩の布施を遣り死骸を見せざる事まで物語れば權三郎は悦びて一々是を書留夫より食事を仕果て勘定を濟し五助を同道し柳町の光禪寺に到りて和尚と對面し五助が口書の趣きを以て佐原の死骸を改めざる事の越度を問けれども始めの中事左右を寄て云ざりしが追々權三郎の劇き尋問を詮方なく五十兩を布施して死骸の怪さを答を辨りし由を白状しければ其次弟を一書に認めさせ夫より縁々と身持して佐原の家へ立歸ると等く内弟子犬上與方お雪の兩人を呼汝等先生の恩義を忘れ不義茲通ふ及ぶのまならを先生を毒殺したる大惡計光禪寺住僧と五助の白状に因り分明なり今ぞ師の讐を報る觀念せよと大音聲に罵りながら正宗の一刀を拔放せば犬上の甚く仰天し僧の惡事の露見せしか是の一大事を兄弟のなきかと呼はるゝ應に答へて犬上が朋友ある破落者十人むかり立出つ、皆一同一切て掛るを笹野の事ともせを爰

ふ追詰被處に斬捨瞬く間五六人を物見事お斬倒せと未だ犬上お手を負せを殘念ありと切齒をまじ汝何とて取逃をべきと立對へど破落者等一懸隔られ殊に膝口に薄傷を受たれば既ふ危き其折柄不思議也乙丸真一文字に駈米り鎗を扼きて片端より突伏々々働く体大人も及ばざれば一同大小亂立を見ても是や佐原先生の怨念子に乘移りて我を助る成念と權三郎の益々勇氣を勵しく縦横無碍一切立進立退犬上を始を一人も殘らむ討取猶遊行お雪を汝と云様手早く手裏劍發止と打付けるゝ狙ひ違を脇腹へぐさと立生死の知るを平卧たり因て一息吐お雪犬上の首を打落して重兵衛の位牌へ手向夫より光禪寺の住僧と五助を引連此旨國主へ訴へければ役人立會詳細は是を詮議せしお黑白分明なりける故權三郎儀師の爲お辭を報せし義勇を深く賞せらるゝ佐原の家督の乙丸一賜り權三郎は後見を申付られり因て笹野の面目と施し乙丸を伴ひて讐の首級を重兵衛の



墓前ほぜんに備そまへ大法會だいはうかいと修しゆして靈魂れいこんを慰なぐさめ夫それより乙丸おつまるの世話せわをぞしたりける  
 叔おじ又また光禪寺くわんぜんじの和尚わうしやう并し五助ごすけとも罪つみみ伏かせしかむ和尚わうしやうの寺法じほふも處しよをべき旨むね  
 一ひとて本寺ほんじへ引渡ひきわたされ五助ごすけの阿房あぼう拂はらむとなりお雪ゆきは本夫ほんぶ殺ころすの大罪たいざいなりと  
 て屍かたねを磔はりつけけに梟うられ犬上いぬじやう三四郎しやうざうらうの死骸しがいの取捨とりせし申付まうられけり其後そのご權三郎ごんざうらう  
 の轄しほりと佐原さはら乙丸おつまるの後見ごけんとあり居ゐたりしが其中そのうちも宜よき門第かんでいを撰まらぎ乙丸おつまるの  
 養育やういくを頼たのみ且かつ門第かんでい中の指南しきあんとも委おたね其翌そのあつち斗寛とくわん永九えいく半八はんぱち月岡つきおか山やまを立出たていて京都きやうと  
 以も差さで上のぼりたるが播州はくしゆ舞子まゐこの濱はまふく大雨おほあめは逢藤あふどう口くちの舊疵ふるきず再發さいはつして一歩いっぽも  
 進まむ事成じやうじやう難がた々たれば餘儀あまなく旅駕たびが籠かごみ乘のりて道々みち播磨はりま攝津せつの名所なごころ古蹟こせきを駕籠がご  
 昇かの物語ものがたりに聞きて桃井ももい村むらふる三太夫さんたふの許もと一宿いしやくせし處ところ古疵ふるきず増ま々た痛いたむで病氣びやうき  
 となりしのは尾形おしがたの神靈しんれいを厚あつく祈念いのねんし供物くもつの洗米せんまいと粥かゆも煮にて是こゝは食くしけ  
 るふ靈驗れいげん著明しやくめいく不日ふじつふして全快ぜんかいしさり夫それより此處こゝと出いて攝州せつしゆに到いたり一ひと  
 谷たにの古戰場ふるさば須磨すまの内裏うちらを見物けんぶつし奢おごる平家へいけの滅亡めつぼうを歎なげき兵庫ひやうご湊川みなとがわ井楠いなん氏の

誠忠せいちゆうと悍けんと布引ぬひひきの瀧たきを一見いけんして惡源あくげん太義たいぎ平へいの神靈しんれいを拜はいし是これより山越やまごふ摩  
 耶やの觀音くわんおんは請まうんと嶮けん岨けんを厭いとむ分登わけのぼるふ思おもはむも道みちふ踏迷ふたよひ行ゆくともく  
 本道ほんだうふ出難いでがたく唯山ただやま深く成なるのみあり秋あきの日の早はやくも暮くれて足元あしもとも定さだめあらね  
 ばさしも強勇かうゆうの權三郎ごんざうらうも殆ほとんど五体ごたいの勞つられを覺おぼえ野宿のじゆくするより外ほかなしと本  
 藤ふじを尋たづね廻まる折柄せりがら何なにやら岩いの狭間はざまより走はしり出いて此方こゝを目標めくけて飛來とび来きらんとま  
 る其形そのかたち人ひとに似にて赤あかき鬚ひげの毛け四方はうに振亂ふりみだき唇くちびる長ながくして顔かほを隠かくは賢母けんぼ凄然せきぜん  
 き猛獸まうじゆうなり是こゝは昔語むかしばなししし聞き及およぶ沸々はひと云いふ獸けものならん若も爲な留とどまば武士ぶしの譽ほ  
 れ過失あやまちあらば一ひと大事だいじなりと笹野ささのの日來ひごらの勇氣ゆうき十倍じゆし刀かたなを抜ぬいて只ただ一ひと討うちと切き  
 掛かれど拂々ひらひらの自得じよくの身輕みかろよて其早そのはやき事こと電光でんくわうの劇げきをるが如ごとく右みぎを討うちば左ひだり  
 交かし左ひだりを斬きむ右みぎへ飛足とびあしを拂はらへむ宙天ちゆうてんふ飛上とびあがり隙すきを狙ねらひ搦かひ掴つかまんを共とも  
 交かし左ひだりを斬きむ右みぎへ飛足とびあしを拂はらへむ宙天ちゆうてんふ飛上とびあがり隙すきを狙ねらひ搦かひ掴つかまんを共とも  
 武術ぶじゆつに於おいて諸流しよの興儀きやうぎを極たぎたる權三郎ごんざうらう争いてり獸けものの爲ために搦とまきん畢竟ひつじやう此  
 勝負しやうぶの如何いかもぞや其そのに次の回つぎ再解さいかい分ぶんをべし



○權三郎拂々を仕留る事

弁佐布里佐内ふ逢ふ事

○義胤播州上月に到る事

弁仲間奉公をする事

斯く權三郎の拂々を切立々々薄手二三箇所負をもと雖も勿々弱りたる景色をかく猛り懸るを拂んとして權三郎の岩角に跪き思ひを谷底へ仰向し落入さるふ拂々の得たりと追付て同じ處へ轉び落るを倒れおがらも權三郎の刀の切先を空様お立追米る拂々の下腹と一太刀ぐさと突貫き彼の弱る所へ身を起し乗掛くさんぐふ斬付二字國俊の指添ふて止を指々るに骨に當り刃半聊々缺れたり（此短刀と後拂々丸と號し其後徳川家乃重寶に成しとくや）皆も權三郎の危死場所ふて僥倖お猛獸は仕留一息ホツと吐今ハ漸々身軀の勞きを覺えし折しも又々小暗き山蔭より一足の猛獸





踊出たり最早今度の戦ひ勝べき勢力なし斯まで我運命の盡ぬるかと思ひ  
 かがらも刀を抜て立對ふ一暫時と聲掛近付を能々見まば熊の皮にて作り  
 たる羽織を着し頭布をのなぐり捨たり儲け人母て有たるかと思へど少し  
 油断せむ彼方も手不持管鎧を引そめて會釋ふし其しに此山中鹿谷小  
 住次郎作と云者あり近來此山より佛々出く作物を荒すより近付寄て突  
 殺さんと斯の如く出立毎夜彼の獸の行方を求めし今貴所の御働さを餘  
 所ながら見物し驚き入ていと譽々れば權三郎の會釋を道に迷ひ此時宜  
 に及びし由物語るに彼の人の嘆息一夫の嚙々御勞れあさるべし甚だ見苦し  
 き破屋なれど我茅屋へ来られて休息し給へとて先立宿所は伴ひ最懇切  
 一待遇よぞ權三郎の其厚意を悦び瓦燈の灯にて主の体状能見れば半齡三  
 十七八位にして人品骨柄賤しを又十五歳ばかりの乙女の傍らに縫針  
 して居たりしが其容色の艶麗は爪外れの尋常なる事山家は稀なる蟬蛻を

り又上手床の間と覺しき處に鏡櫃を飭り管鎧二本外に種々の狩道具なら  
 ぬ武器も見ゆるよ如何様是の由有る人の末からん未だ初老も及びむ  
 して山中に世を避る事仔細あるべしと與床しく思ひ失禮ながら其しに記  
 州和歌山の家中笠野權三郎義胤と申者様子ありて諸國遊歴致し備前岡山  
 佐原里兵衛方ふ暫く在留し處橋磨攝津國の名所を一見せばやと當八月岡  
 山と立出布引の瀧より摩耶山に詣でんと嶮岨を厭はず分登りしと思はむ  
 道に迷ひ今日の時宜ふ及びしかり然るに計らずも尊公の助を得しに誠  
 小我大幸と申べし又御主人に尋常の山人にて在るまじ最前の鎧の構  
 へと云身の働さ如何ふに武術は達しられし英雄と見進る願くは尊名を  
 承り度と云ければ主人の莞爾と笑む御客人の姓名を聞て我名を告ぬ  
 り甚だ不敬あり何をか隠さん其しに孫州上月の城主木下備後守の家来  
 と佐布里左内重可と申管鎧の指南役を勤主君も敬いれし小堀川軍太夫



と申候者の讒言に掛永の暇を蒙り上月を追拂はれ夫より浪人となりて此山中に閑居致し事口惜は次第なり然乍ら是等乃儀押て辯解おさん事難に有るに然すと主君の不明を求む似て不臣は若免む難し因て只天の時を待つ、日を送のと思へば最早三年も及ぬる秋乃末妻を失ひ此小女花と申者と兩人貧と甘んじ二君は仕す切て此小女を世に出度ひと涙を合て語けきば義母進て水火をも辭せざる權三郎左内が述懐然も有んと深くも察し如何もして此人を今一度世に出さばやと心中に誓て猶終夜語り明し翌朝權三郎の暇と告げ再會を約して佐布里が宅に立出夫より摩耶山小參詣し三木の裏越は掛り上月の城下は到り會津屋重助と云る旅籠屋に逗留し主人重助を招き當御家中に佐布里流は達したる御侍士の誰なるかと尋ねたるは夫は三百石高にて勘定方頭取を勤めらる、濱田六郎左衛門殿からん此人は彼流義の鎗を能遣ひ給ふ由風聞ありと教しかば權三郎の

打喜び其は些仔細有よ其家へ奉公は佳込と何と御世話下さるまじたやと頼むし重助の黙頭を幸ひ此程仲間一人を抱たしと仰られたり私との甥なりと御世話致さんと夫より重助の濱田の方へ行此由を聞けきと早速連來るべしと有し直に權三郎を引連れ濱田方へ行て目見えも濟是より權平と改め賤しき勤なれ共忠實敷働さ六郎左衛門の心を適ひなれむ若黨愛助と云ふ古參の者は是を妬む其中宜からむ或時明番の供をして大手々前へ來懸りし此方より木賊色の肩衣見びやう若黨仲間おど隨へ來る侍士有りて六郎左衛門と互み式禮おし彼の侍士今日長谷川の道場にて試合あきば是より參るよより貴殿にも御出あれ然らむ御同道申さんと直に兩人連立て長谷川の道場へど到たる此侍士の列人からを則ち權三郎が顔を見知度と付現ふ佞人梶川軍大夫をり借又長谷川新六郎同く新八郎の兄弟は俱小寶藏院流の鎗術を申立梶川と伯父甥の間柄なれは軍大夫の引立



おて指南番となり一家中に敬い暮るがま、高慢増長の白痴なり斯て權  
 三郎は權平の供待の中稽古場の体を愛助と俱に物蔭より覗きけるお各々  
 代るく槍術を競ふを見て片頬に笑を含みながら皆可なりと遣る、と譽  
 ければ愛助の聞谷め下郎の分際として何を知て出過た事を云をるぞと遣  
 込る中梶川の濱田と俱に試合を見物して居たりしが濱田に對ひ貴殿の佐  
 布里流の御鍛練なまは斯る折柄久振にて一手拜見致したしと云ける傍よ  
 り長谷川新六郎も進み寄及ばおがら弟新八郎御相手仕つらまべしとの  
 勧めは濱田の辭まるも臆したるに似さればと權平を邸へ遣し稽古槍を  
 取寄るも權平は疾くも歸り来りて主人は槍を渡す其体身の備と云法は適  
 ひしかば六郎左衛門も此の凡者非すと與懐しく思ひながら請取て長谷  
 川と共に道場お立出て互にヤツト聲掛暫時雌雄を争ひしが元米名聞を好  
 まぬ濱田おれば腹の中お思ふ様殿の御師範をも致すべき長谷川おれば負

まも大人げおしと能程に對戰故意と參つたりと聲を掛れむ新八の槍を引  
 む濱田の眉見を充分に突けまは性質温順の六郎左衛門も少しも面色を變  
 て元の座席お着けるが始終を見たる權平は怒り堪無新八様暫くと聲懸  
 おがら踊り出るを濱田に見て驚きつ、下れと一聲叱き共權平は些も聞入  
 む私に生國の紀州なるが本國に於ては槍一騎太刀一騎と申なり槍術の殊  
 お重しとし下々までも此道をお心得ぬ者おなし某し下賤の子おまじも槍術  
 の流儀争ひお親の勳氣を受斯の如くの体たらく參つたりと聲掛くも手を  
 止めぬと申御流儀の珍しく覺ひ何卒一手御相手おなり申たしと怒りを顯  
 し望けまは新六郎の面をげ如何様新八郎が鹿忽おては幾重も濱田氏  
 に御詫申べしと弟を此度省慎まじも權平は猶退かさまは無禮至極と濱田  
 の嚴敷叱るを梶川軍太夫進み出然を云まは濱田氏幾し進む御家来殊  
 勝なり免らく試合させらるべしとて目も物見せく遣と言ぬばかり新八郎



目配をるを權平心に可笑思ひ身持へして進み出るに先一番道場の世  
諸役長谷川一郎立向へど權平の其構へ拙きは知る無手よて向ふ一郎の  
怒つて一突と突て掛るを何の苦もあらず手元へ入て鎧を叩き落しと

○長谷川兄弟不覺の事

并新八郎愛助を討る事

○權平長谷川兄弟と討事

并佐布里左内歸參の事

備も仲間權平の第一番の立會は道場の世諸役長谷川一郎何の苦もなく  
勝ければ二番は岩瀬兵馬と各乗出暫く合せしが見事負て引退く三  
番は三田村銀平是も叶はむ突伏らる四番五番と高弟等次第出て對へ共  
皆悉く後きを取れば是は口惜しと長谷川新八郎獅子の怒を顯はし只  
一突と立向ふを心得たりと宙に受留漸暫く双方隙を窺ひ争むしが當代

幾人と指を折笠野權三郎が精妙の鎗術に幸て敵すべき怨地云甲斐なく  
も負おけり權平の手練斯迄と思ひも奇ぬ事なれば梶川濱田は醉るが如  
く呆き果てて居たりける此時當家中の大先生と聞えたる長谷川新六郎は  
顔色を變第よさへ引を取せ高祿を戴く我々主君母對し面目おし濱田氏彼  
下郎を我お賜るべし槍玉よあげ恥辱を雪がんと餘儀なく乞れで力なく承  
知しければ新六郎は立上り下郎參れと真劍の手槍を把て突掛るは權平少  
も騒がむ是は無法あり不禮なり其儀おらばと木刀を手よ把父が傳書は自  
得乃手練月形の小太刀の名法を以て繰出す槍先を支つ拂ひつ互に秘術を  
盡す中權平は手元へ踊り込と見えしが新六郎の利腕取てまた、かに投付  
早く道場の外へ飛出し愛助旦那の御供を頼むるよと云捨郎を指て歸り  
しかば愛助は只肝を消し天狗か神りと恐まけり然らば新六郎は始めの廣言  
に似もやらを彌々面目を失ひ一座白けく見にけるは小氣味能く思へども



濱田は呉々も權平の無禮を謝早々歸りつゝ、篤と思案を運らむ惜むべき壯士ながら此儘置いて速くらす一大事發らん不便なれども權平を手討ふせむんば叶ふまじと翌早朝呼出し汝入る腕立より出頭の梶川が親族なる長谷川兄弟ふ平き目を見せたるは忠義に似て却て我へ不忠ふ事を事の騒ぎを引出せり目前故主が刑罰の刃と請よと突然舟繰出は槍を權平と押へ仰せ母背くは有ねども某が申一通り御聞下されはて上は御存分になり申べじとて實父笠野權頭事大坂ふ於て討死し高弟權大夫の養育を請紀州家へ仕へ同役種田と議論し國を放れ備前岡山家中佐原方ふ暫く在留し其後摩耶山の山中にて拂々し出會しも僥倖ふ仕留又佐布里左内ふ面會し彼人の歸參を取計はん爲當家へ下郎奉公爲由の始め終は物語りしかば濱田は聞度毎し長嘆し其兩眼有るが斯る義勇の壯士は無禮をなせしは返さくも無念なり況や我師の爲し信義と盡さるゝ貴師の心中感

むる母猶餘りありと濱田も義を見て引ぬ大丈夫假令我身母禍を招く共師の爲し俱々力を盡さんと密談數刻し及びたり是等の由を若黨愛助の戸の節穴より覗き立聞せし目れ端母煤れ付たるふて權平敏くも是を悟り責問たる母立聞したる由語りしよ必む他言をべからむと堅く口留し金一兩與へければ悦びて酒屋へ行しが頓て微醉機嫌に歸り來る搦手城門の西の方藪小路にて長谷川新八郎に出會しふ渠の聲掛是々其方の濱田氏の若黨にていなさかと問れて私に濱田の愛助ふていと答るを新八郎近寄其方母少々尋問たき事ありと酒屋へ誘引種々馳走して金子多く與へ昨日濱田が屋敷へ歸るくの様子且仲間權平の事を問ければ口さがおき下郎の常邸へ歸りて御主人は權平は手討ふ成んどせしより權平は紀州和歌山の家中笠野權三郎義胤と云ふ者佐布里の歸參は執行はん爲仲間し身を借し奉公せし事の始終を告るし新八郎聞て然もこそと合點き愛助が耳に



口を寄せ是を斯して何様々々せよと心中の謀計を云聞せ滅封したる状管  
 を渡し新八郎の酒屋の勘定を濟し早々いあかれてころの歸りけれ扱も愛  
 助の大醉の千鳥足にて歸り来り己が部屋に立入り今日の貴殿の惠みふて  
 大い酒母酔過たる故氣分悪く漸々の事まで歸りしとて呻り居るを權平  
 種々介抱して寝させしふ夜乃亥刻過頃時分の宜しと愛助の状管よりたり  
 と落し是のあたり御同役の早川三太夫様へ急の御用向なりと最前旦那の  
 仰せを承りりし酒の心を引れて忘れり如何せんと言惑の体ゆゑ權平  
 の氣の毒に思ひ我代りて届々べしと状管を受取何心なく駈出せしが小戻  
 りしと下女を呼云々の御用にて早川様迄行程お愛助の酔伏て正体おし少  
 の間部屋番と頼むかと云置再び足を早め駈出し柳の馬場を行過ぎは兩  
 側の萩の茂みの花盛り夜の錦も措袖お籠れかゝりし花の露霽ても晴ぬ雨  
 上り又降ぬ間歸らんと急ぐ心お提灯の消たる儘に提おから泥濘足元踏

めて行左手より聲をも掛す突出したる氷りの槍先尾形の神の守らせ給ふ  
 う粗ひの外まで合羽越股をうまると身引れば又も右手に閃く槍心得た  
 りと木刀ふて拂ふときまど敵の兩人劇敷中にも合羽をかながり懐中なせ  
 一合口を取ださんふも其際おと然も足場の上より赤土勝の泥濘り思ふふ  
 二人の長谷川兄弟彼愛助を手なづけて我を此所迄偽引しと憐れど歸ら  
 ぬ此場の手詰最も危く見えたりけり茲母又濱田六郎左衛門の母親も孝を  
 盡し妻も先立れ獨身なりしが今宵も母の眠て後其身も臥床お入下かど  
 亥刻過頃不計目を覺し咽の乾くま、下女のおさんを呼立ると仲部屋  
 より返事して立出来り主人に怪み疑はまると權平に頼れ部屋番致せし  
 處權平に早川様へ出行し後にて愛助を又遠しく外の方へ駈行しと告けれ  
 ば濱田に忽ち悟り借の幾勇の壯者お怪我おらせては一大事とさし温厚  
 篤實の六郎左衛門斯る時の危きを忘るゝも勇者の常長押し掛たる管槍を



取より早く駈出し柳の馬場の後方なる堤へ上りて勝負を下見中愛助を  
見付濱田の槍取直し不忠不義の惡僕め誅を請よと只一槍突貫き堤を飛  
下り見てあれは權平の流石其道達せしる共二人が等しく必死とありて  
働くまど刃物のあらぬ悲しさの聊か手疵も受て段々後へ下りながら對戰  
さま誠ま危く見えたる處へ濱田の併掛相手の長谷川兄弟と見受より權平  
急を輕舉る濱田六郎左衛門采たりと呼りりく割て入を兄の新六郎の  
惡く濱田が助太刀と鎧を返しく立向へば祿盜人の人非人思ひ知やと繰  
出を濱田が一槍受損し胸板ぐさと突貫れアツと一聲叫びも敢を尻居み控  
と倒れたり新八郎の今權平と火花を散して挑み合じが兄の叫んで倒れし  
まハツと驚く隙に權平の着入て槍打落し避んと走るを引捕へ腕捻上て縛  
めけり濱田の權平の働きを譽權平の主の救ひを謝し互母一息吐て生捕を  
引立々々直し屋敷お歸り長谷川兄弟が今夜の始末且笠野權三郎の義心佐

布里左内の冤罪堀川の隱惡悉く一通し書願一家老中へ訴出ければ殿一  
方から驚き給ひ家中一統大評定になりて亂されし處新八郎の拷問不堪  
無白状及びびけまは堀川が隱惡明々露顯に及殿始て先非を悔て佐布  
里左内を攝州より召返されしとなり

○權三郎上月を立退く事

并妹お梅に巡り會ふ事

○お梅國元の變事を語る事

并兄弟敵討首途の事

爾程に上月の家中より今度の騷動付中老堀川軍太夫の舊惡露顯して  
佐布里左内を召返され權三郎の義勇拔群なるを大いに褒稱有て何卒召抱  
たいとありけま共固く辭退しされば金銀衣服數多賜ひ又佐布里左内へは  
新地百石加増せられ堀川軍太夫の切腹家屋敷没收とあり長谷川兄弟も家



屋敷取上られ元新六郎に其場にて濱田の爲に討れしに罪科の沙汰なく  
 弟新八郎に死刑は行はるべきを格別の御慈悲にて國中を構えられたり儲も  
 笠野權三郎の功成名遂く身退く如しと思ひ濱田佐布里に暇を告又一家人  
 中ふも惜まるれど遂に上月を立出大坂指て赴きしが頃十月の中旬浪花  
 京橋の邊に父の戦死せし跡と聞懷舊の涙止敢ざりしも夫より天満なる天  
 満宮へ參詣し天満橋より大川の景色を眺るに冬の初めの鴛鴦鷺蘆間ふ眠  
 る長閑さの實子や小春の名の如しと思えず折るる刀の鏝へがつたり  
 當るや否や取て捻上るや否は何者よと振向に此里にて人の怖る、茨  
 木組の使正茨木正太の子分あり編笠以顔を隠し判事物漆の大模様ある廣  
 袖の日和下駄何をも喧嘩仕掛の七八人理不盡の逆捻も爰が堪忍と權三郎  
 の手を下で記けしに彌弱身を付込多勢頼む破落戸中一人頭立し大  
 男月形三次と名乗しも編笠腕は長谷川新八郎ありて汝重る遺恨と罵り

あがら一同ふ刀を抜連斬掛るを此方も心得たりと抜手も見せむ八方相手  
 一切散し遂に新八郎を大袈裟に切放まよど餘の者此手練に恐れ皆散々  
 一逃失けり折るる屋何某が出入の狭客楯の小六と云る者天神へ參詣の  
 戻り掛此有様を見て權三郎が人品と云多勢を合手し戦ふ早業母感じつ、  
 側立寄名と名乗て知己に成んと云權三郎も實父の舊跡ある地なきに  
 足止止んと思ひ早速承諾て萬事を此小六に頼み一月形の三次を殺して  
 る事も小六が内濟を取扱ひたる恩儀と云此俠客も以前の武家の出生にて  
 武術の心得もあり頼母敷男なきに權三郎に兄弟の義を結び浪花新地は家  
 を借て笠野蘆雪と表札に記し尺八の笛と能吹ければ是を指南し遠磨の喜  
 六と云子分に勝手を賄はせ又小六の子分等武術を教へ暫く無事に暮せ  
 しが此年も暮て明きを寛永六年正月ふあり千歳を祝ふ松飾注連掛聯ねし  
 門口へ年まだ若き娘の順禮詠歌謡ひて立止まるを通きくと聲のくれど



聞ぬ振しと表札ふ目状注笹野とあるの若や紀伊國よりおのさきたる御武  
 士ふて權三郎様とい申さむやと問けるを喜六の怪しみ斯と權三郎ふ告げ  
 ればはてなと云つゝ立出見るよ十一歳の時別れたる妹お梅なれば這の妹  
 の何としく此處迄尋ね来りしぞと言きまお梅の驚き餘りの事お氣を失ひ  
 と倒るゝを是れしたりと抱き上て分抱なせば漸々おして正氣付ど其嬉し  
 きと哀しきも物も得言を泣居るよ分權三郎のお梅よ對ひ何故斯の姿をお  
 し年端も行ぬ其方只一人此處へい来りしぞ何か様子の有事あらん如何母  
 くど問けるよお梅の落る涙をはらひ尊兄が他國爲れし後父上への御病  
 氣然と醫師が盡かど妾が分抱其甲斐ありて御本役のをされたれど夫よ  
 猶々御老衰去年の秋の某の日は御前勤の歸るさの宵闇紛れ水神の木立よ  
 忍ぶ曲者ありて父上様を欺し討果敢あさ御最期遂られしと聞より義胤驚  
 き呆れ暫し物をも言ざりし天を仰て長嘆し嗚呼過てりく其し御側ふ





在らば斯る變事も有まじき小口惜き事をしてけと專ど悲嘆し沈しが  
 斯て果と氣を取直し而て其曲者の何奴にて未だ行方不知ざるかと問  
 れてお梅の涙をはらひ上も妾が愁傷を一方成す憐れ給ひ種々御鑿穿有  
 ける其場お落たる小柄ころ種田が所持の品にして彼者先頃逐電せしも  
 再び此地へ立歸り權三郎への意趣暗し母老父を暗討せしならん早怯未練  
 の振舞あり草を分くも鑿穿あり彼奴を刑ふ所をべたなまど然もせば孝子  
 の本意も空しく女ながらも笹野の娘諸國を尋ねて權三郎母巡過なば力を  
 合せ父の仇討なまべしと殿様よりの有難き御免許ありし御墨付し御饒別  
 迄賜はりければ母上様ともろとも順禮姿一身を備し上方さして登り  
 一途中貝塚峠といふ處で母上さまより御病氣起り山の宿場お宿を取り長  
 く滞留おす中も醫藥の更なる御分抱のおよぶ限りお貝塚のそれ甲斐なき  
 旅の空行て歸らぬ泉下の客となりたまひぬる悲しさを察せられし小口惜

る人の世話おて葬式も例のごとくお營みつゝ涙ながら此處を立心なま  
 きの道中も障るおとあゝ涙花まで日代經て辿り着たりしと思ひ掛るを元  
 様一巡り會ひし神佛の守らせ給ふか父上や又母上の導きお堪じし事やと  
 父母の位牌一添て報響の危許状をば差出せお權三郎向うは藏と歎きの中  
 の恍惚なりと君の御恩は拜すおつ々種田がなせる慈悲を深くも心まいさ  
 どほり無念の涙お昏けるが汝種田五郎左衛門養父の讐敵思ひ知れを拳を  
 握りて突立し其有様お百千の大敵たりとも恐ろざる天晴丈夫と見えたり  
 けり是よりお梅お此家に置いて善六を相手し八重垣流の小太刀の秘術を授  
 ければお梅お父の讐を討とさ一念にて晝夜油断なく稽古をなしたるより未  
 だ十三四歳の少女おれども僅數月の其中より早太刀筋も法も叶ひ身も上  
 達したりしかば權三郎も歡び猶能く試まべしと思ひ居たる中或日稽古し  
 疲れしや横よりて熟睡の体にお機を宜れと拔足さし足忍び寄拔掛持し



乃の鐔音がツキとさするふお梅の岸破と跳起つ、四方を叱度見廻したる  
 眼の配り身の構へ法小叶へは兄義胤の只管感も其上達を打悦び假令敵と  
 戦はを共止め位は刺事出来なん率同道して響の行方尋ね求めのに出べと  
 て人に顔と見知られぬ為又道中の助にも丸山妙安寺母て虚無僧の免許  
 を請鼠色の小袖ふ尺八袋へ一刀を仕込て天蓋一面と隠しお梅の元の順禮  
 姿に兩人支度調ひたれば小六善六に名残を告て浪花新地を立出つ、同胞  
 の一二町と隔りて東海道を下り行い敵の所在と探りながら急がぬ旅の日  
 と重ね既し駿河の國府を過江尻沖津の浦傳ひして陸埜峠へ差掛り坂口の  
 岩根ふ腰杖掛同胞の辨當を聞きて富士を脊中ふ田子の浦を眼下に見下し  
 實に海道一の風景と旅の疲れを慰めよ五折長嶺の方より同じ出立の虚  
 無僧一人登り来るを不圖見るを敵種田ふ馬騷たれば若や夫かと目を注て  
 お梅を木陰に忍ばせなどる中彼方の虚無僧は尺八取で挨拶の笛の音高

く吹出せど權三郎の應ひやらを暫時窺ふ氣色なれば彼の虚無僧は駈寄て  
 吾挨拶の笛を吹か吹合さぬに抑り當派の故賢を知らぬ偽虚無僧と覺えた  
 り我本山の命を受汝の如き紛き者を詮議もべきの役僧を天蓋脱けと云  
 様尺八振上撃て掛れを權三郎も立上り返答もる間もどかへ同胞信  
 尺八右手に取汝と云つ、打えらふは渠は早も直と摺寄權三郎を搦捕み二  
 間餘りも投付る機會は双方天蓋脱け權三郎は投らまがら宙で閃りと  
 身を蹴らし地上に突立尺八袋に手を掛て懸掛らんと思ひの外敵種田にお  
 らざれば這り尖禮御免あるべしと忽地顔色を和らげて一禮おもよむ彼方  
 も面状和げ我の關口魯伯と申奥州南部の家来あるが同派花が幸左衛門事  
 主家母傳はる三種の寶を盗取て逐電し今一行方の知悉は主君の内意を  
 蒙り其奴が所在探らん為風俗を變諸國は修行ありつ、京大坂へと志し  
 東海道を登りしは只今足下の丈格好彼の幸左衛門に騷騷たれば思はぬ狼



藉仕つりしとて互ひに禮を返し重ねて權三郎事の仔細は替り共某ともも  
 親の仇を尋る紀州浪人あるが足下の容も我尋る敵も尋る様子を驚  
 と見届けんとい圖に思ひ廻せし故密を合はる事をも忘る心よもなき失禮  
 せし段幸ひ免し給へど云つゝ妹お梅呼出し我姓名をも名乗彼關口と諸  
 俱に其夜の倉澤の木賃宿何某方お泊りけるが此日は幸ひ泊り客の最積な  
 きは夜よ入て權三郎の關口の身の上を問るる元駿州の産關口八郎左衛  
 門有白の一子なりしは仔細有て府中の城下よ捨られしが成人て城主お仇  
 へ其後武邊修行の砌り出羽國ある銀山よて強盜數名を討亡したる事など  
 委しく語りたり此關口の槍劍の術は勿論柔術の達人と世の人も知り然も信  
 義の武士おれば權三郎も深く慕ひ茲に兄弟の義を結び關口お路用お之  
 しきを察せしかむ金五十兩を取出し贈りける關口固く解るるを權三  
 郎の種々よ進むるを魯白も止事を得ず其厚意を感じて受納むるを權三

郎も喜び忠孝を前よして義状後申すとおきは足下も我も功成の後巡り  
 會日の有ぬべしと再會を約し翌朝未明お關口の茲に立出上方持て登りけ  
 り又權三郎の足弱を伴ひ殊に急がぬ旅おれば茲に一日滞留し旅の疲を休  
 しし忠孝義心類稀なる權三郎も爰よ一の厄難を離せり抑此旅籠屋の主と  
 云は元海道一乃護摩の灰の頭よ熊手の三次と呼びしが今ハ六十九歳に  
 り々然様の惡事の絶てせざむと頃日風邪氣母て此座敷に隣たる一間に臥  
 て在ける處最前權三郎お貯へ金の多きを窺ひ見て久敷大金の面を見ざり  
 し母今百兩餘りも奪ひ取れば嚇かす快き事おらんと思ひ替の惡念再發  
 て子分の誰彼お謀計を授け翌朝の食事よ巴豆を入置るる權三郎に神  
 ならぬ身の知る由なく是を喫せしむば俄然腹痛し瀉るる事夥多しお梅  
 の大に驚きおがら分抱を共中々治る様子も見えず詮方盡て見ゆけり  
 ○笹野權三郎倉澤にて危難の事



○并三島まで町人を助る事

○義胤江戸表へ来る事

并紀州家の上屋形へ到る事

笠野権三郎義胤の熊手の三次が毒計に陥入り腹痛彌々堪難く梅一人  
狼狽て藥を醫者よと介抱をまふ三次も深切らじく執成じ近邊の庸醫赤井  
玄石と云ふ者を招きしお是の水の代り故と藥を與へたれば二日一夜瀉  
して三日目漸く止りしと雖も権三郎の太い弱り而腹脹凹み身体疲れ  
く歩行心再任せむ玄石の徐々按摩をどして胸巻の金を探り冷る物と腹に  
付置る、其甚だ毒なりと云ふが権三郎の胸巻を解き蒲團の下敷で卧居  
たししよお梅が晝夜の介抱等聞ならざるを神佛に納受為給ひしお第四  
日目より全く腹痛下瀉とも止く快よくありければ其夜の同胞も安心せし  
より疲れ出て前後も知む打卧たり然るよ彼玄石の様子を見濟じ深更を此

家へ忍び来玉卧たるお梅を引擔ぎ外の方へ駈出さんとなをゆゑお梅のお  
おやと叫ぶ聲お権三郎の驚きおがら目を覺し刀を取て追んむむる時眉間  
と現つて投付たる火入の眼潰し灰の一間を飛散て兩眼へ入り殊に額を打  
きて目眩き無念々々と遠廻る其間蒲團の下に金子の疾奪取れ一時不起  
る禍ひの元は主三次の仕業と夢も知れ斯る處へ渠等が駈着て深切らし  
き介抱し心と免し無念とあせれど其甲斐なく然もても勾引されし妹お梅  
の今更是非お我足手叶わぬ敵お達とも撃難しと自ら心を勵まして尚  
兩三日滯留し腹の中に思ふ様假令お梅を尋ね得る共金も残りむ奪れて進  
退放り谷りたり渠勾引されしとて妹の命お係る事は有まじ一日も早く江  
戸表へ出知人を尋ねし上又詮術も有おんを腹お開腹お答で主お少の路用  
を借り元來健勝なる生れなれば眼の痛お治らされ共氣力全快よければ  
五次も辱も好意を謝し倉澤を立出宿を善く尋ね歩行く三島の驛迄到る



日は服病も全快にたりしかば先明神の社に請き武連長及を祈り森松梅の  
 恙なきを念じ茶店に腰掛掛休居たる折柄往來の人黒山の如く立止るを何  
 事あらんと權三郎も立寄見る母泣屑町人の上方歸り道中馬より今下際  
 お九州侍士の刀が柄に泥草鞋を當たりとて件の武士手討ふも位無き  
 勢ひは彼の町人の平謝りお詫けれども勿々聞入を終ふ刀を抜で斬んとす  
 るに權三郎は鬼を正恐む見物の群集を押分町人の爲に理非を説て謝を  
 亦もふ渠底意地悪く云募る間母素早き町人のつと進出下入込の中へ紛  
 て行方知れを成けるおど合手を逃せし上り其方が相手をも有無を云せ  
 權三郎母切て掛るを身を譲り付入て利腕押へ刀を奪取り發打と腕を  
 如たの馬鹿者お言葉と費をも無益なきと取あらは能聞べし汝も兩刀帶せ  
 しかば少くも武士の法も辨へ知るべし高の知たる町人を手討し致した  
 事とて汝の譽れに成しも非を渠も定めて妻子も有るは武士の魂掛

柄先を織さきし町人の慮外からを汝が油断せし故あり某し双方の爲を  
 思ひ理非伏述しし却て我お仇せんとい言語は絶する人非人以後に必を慎  
 むべしと小兒の如くお教訓され權三郎の救出たる刀を拾ひて鞘お納め後  
 をも見むし逃失けるに誠は氣味よき有様あり斯て權三郎は徐々と此場を  
 立去ければ見物乃人々權三郎の後姿を指差何れの虚無僧ふや人間ふよ  
 も有まじ大男の刀を奪取て種々教訓し町人を助けし有様は凡人ならしと  
 動搖めたり權三郎に其日箱根一宿一翌日小田原を通り過るに昨日の  
 町人追駈来り誠は危き處を御助け下さきし再生の恩人なりと幾度も禮を  
 述べ私し江戶日本橋肴屋新八と申小商人ゆゑ江戶表へ御出府と何らば  
 虚無僧寺へ御逗留あらんより私し方へ御入下さるへし二階の何時も空で  
 居れば心置おく御宿となされ諸所御見物なされよと最真實お言けき權  
 三郎は大母悦び然らば貴所のお言葉は甘へ御厄分ながら四五日御世話に相



成べしと夫より同道なまは新八の喜びて四五日の借置五年又御生涯  
 おとと御宿仕つるべしなど、物語りながら翌々日江戸表へ着けきば新八  
 の女房の待詫たる餘りよや敷居を跨ぐや否大聲にて何處か今迄何して居  
 られしと云は新八の伊勢へ参り夫より京大阪金毘羅宮島と先か唐  
 土天竺まで行手手前の顔が見度なり又夫よりも此客人の命の親御馳走申  
 せと三島の始末を悉皆語るよ女房の權三郎の顔を始をて見るよ年若く色  
 白く人品骨格清かなるよ心を動し亭主を打捨權三郎をちやほやと待遇し  
 ければ新八の些少悋氣々味あるも又可笑し爰は權三郎義胤の翌日紫内狀  
 頼み先曲輪の内の大名屋敷の薨々たると見又市中の繁華等流石も天下の  
 武將の御膝元は格別ありと驚き感々淺草寺の觀世音へ參詣し上野東叢山  
 神田明神と諸所を見物する事四五日はより本所深川亀戸と名所舊跡殿な  
 く歩行或日靈巖島の邊へ来るよ下舟くどろ聲嚴しく行列正しく来る

何れの大諸侯の見るよ三葵紀の字の合印の紛ふべくもあき御三家の其  
 一ある紀伊大納言頼宣卿おして今日富ヶ岡八幡宮へ御社參の御歸路あり  
 權三郎驚き傍らを跪つ居たる中御轡物近く成ま、お思は大地に平伏  
 頭伏砂に着けきば大納言殿御轡物の中より御覽にて不審し思召御駕籠  
 脇の菊地金彌を召て彼の虚無僧躰の者大地に平伏下座なしたる、何者な  
 るか問来れと仰よ金彌駈来り一目見て大お驚き權三郎殿のお久しや菊地  
 氏々と互に一別以来の挨拶お殿の待遠く思召又も近習を遣し給ふよ金彌  
 の驚きと馳歸り渠の笠野權三郎なりと申上げきば然ば用こそあき汝後に  
 残りて連来れよとの仰よ金彌の畏み權三郎引連れて赤坂の上屋形へ  
 歸り来りし權三郎は只一人御前お召れ恐るく御次の間お居るを大  
 納言殿の近ふくと呼給ひ汝先年國を立去しおは養父の死去を知らず在べ  
 し幕府の地を踏ながら我館にも参らむ不忠不孝の人非人我自ら成敗せん



覺悟を致せと槍追取て突掛給ふに權三郎の恐れ入ながら兩手を上王轄く御手を御止め下さるべし私一末最の思出言上仕つり度一儀ありと本國を出しより諸所を巡り大坂在留の砌り妹梅は巡會始めて養父の横死を知らる事より妹お梅お武術と習ひせ同胞仇討ふ出たる趣き薩埵の危難に因窮し三島の驛母て當地の肴屋新八と申者を助し事迄始終試逐一申上れば元承御心に叶ひし權三郎ゆゑ殿の御怒り疾くも解て彼の孝よし忠あり幾有り可惜壯士斯まで薄命ある哉と憐に思さき落涙し給ふ事忝けなし然に權三郎の首尾能讐を討べしとて金創救命の丹藥を納たる印籠に金子を添て賜りけしは權三郎の身お餘る御恩惠と是を戴き深更に御前を下り肴屋へぞ歸りたる初翌朝二階ふて拜領の小判を並べ再拜して居たりしを女房に見て窃に新八に耳語やう二階の客人は盜賊お違ひを昨日の朝内を出て夜半過お歸り今二階母て小判を並べ居たるを見付たり万一此

事露顯せの大變ゆゑ早々宿と斷られよなど、夫婦相談おして居たる折しも若黨仲間を召連たる立派の武士入来肴屋新八と申に此方あるや笹野氏の在宿かと尋るを頃や捕手の来りしと女房の裏口へ駈出し新八の青くなり震々と震ひおから權三郎は斯と告ければ義胤合點て對面せしに彼の武士一禮して某の紀州家は近來召出さきたる三傳離相流の槍術指南仕つる石野傳一郎員氏と申者なり今朝殿より急の御用有て只今故意く是へ罷越たり後刺身共が道場まで御出下さるべし仲間お持せたる風呂敷包衣類一重袴羽織を添て權三郎の前に差置甚だ鹿服おひへども御着用下さきよと言と聞權三郎は押頂き君恩の忝けなきを謝ければ石野は所書を差置私宅へこそ歸りけれ借も新八に此体を見て紀州家の藩中なる事を始めて知り漸く安心し女房を呼彌々權三郎は敬ひけり

○權三郎敵の在家を聞く事



并敵種田を取逃す事

○義胤再び大坂へ赴く事

并播磨離りて海賊退治の事

備も笹野権三郎義胤の早々仕度と調へ何の用か知ねど牛込神樂坂ある  
 石野傳一郎の道場へ赴き案内を乞ければ取次乃侍ひ立出此方へ御通り有  
 べしと客間へ請じ暫く相待處ふ傳一郎出来り殿の御内意は貴公が父祖傳  
 来の小太刀機台の興儀は餘人し曾て知る者おし權三郎の身の上お万一の  
 事あらば其術せふ斷絶せん因り汝懸望して習ひ置べしとの仰あり足下若  
 許容あらば我三傳離相流の興儀をも傳へ申べしとの事お權三郎は頼宣卿  
 の武道に御執心没るるぬ状悦こび感じ夫より兩人互に秘興を交易し立  
 會試むるに權三郎が早業の精妙勿々餘人の及ぶべきにあらざれば傳一郎  
 彌々感心し我三傳の寶藏院種田大島の三流を合し三傳の一流と申なり備

又足下は我一大事の秘傳を教へ申さんと傍の人と逃げ權三郎が耳より口を  
 寄彼種田五郎左衛門と申者の我師と頼まじ種田藏人の一族も互に聞は  
 渠の當今上州高崎安藤對馬守殿の家中に居らる、由なり疾々尋ね見らる  
 べしと語りければ權三郎は飛立むかりに悦び何より有難き教を奉り  
 感謝は堪はずと厚く禮を述べ着屋へ立歸り翌日早々新八方を立出上  
 州指て馳行たるふ二日路にして高崎に著家老安藤典膳に對面し御免状を  
 見せ種田の舊惡を委敷演舌に及びけるに當時主君對馬守は江戸在府おれ  
 ど捨置難しとして種田を招き寄じらば今の改名して種田逸平次と申せしが  
 何心なく入来るお隠し置たる捕手の役人踊出り手込にるし力を預る舊惡  
 の次第と責問ふ逸平次は笹野権太夫を闇殺し紀州を立退し事を殘らぬ  
 白狀お及びたり因て追分川邊の牢屋に嚴敷繋ぎ置此由江戸邸へ言上を權  
 三郎は高崎お逗留して其沙汰を相待たるに未だ種田が運命の盡ざりけん



爰に逸平次を幾兄と稱する大坂方の殘黨赤間東左衛門腰野又八と云者兩人頗る武藝も勝れければ種田が日米の恩儀を思ひ追分川の水底を潜り牢獄を破りて逸平次を救ひ出まを權三郎に此近邊に宿りて居たるゆゑ一人の牢番駈来り讐の逃たる由を告ぐるふぞ權三郎に急ぎ駈付敵を竹藪に追込けるが斜ふ切し竹の株に足を踏抜苦痛不堪を猶豫して居る中に行方知れをありにけり權三郎に口惜く思へ共其甲斐なく悄然歸り来るに安藤典膳の之を聞申諱の爲自殺せんとするを權三郎に我怪我より猶豫し且に敵の運命未だ盡む捕遊したるに尊公の過ちふははをどて是を宥め足の疵全快せし後高崎表を立讐を逃せし趣きを書面ふて石野方へ知らせ又肴屋新八方への長々世話になりし禮状を送り其身に木曾路を經る道々妹お梅の行方を索め又々大坂を出小六等を尋で元居し處に住居なし空しく月日を送る程に光陰白駒の隙と過る如く疾くも寛永十一年と成ぬ備又先年

東海道倉澤ふり列れたる關口魯白に中國西國九州まで彼賊を尋ね巡り此程大坂へ出て不圖權三郎一行合一列以来の物語して權三郎の住所へ俱に来り夫より倉澤舟で列れし後妹お梅は勾引され所持の金まで奪取らる上州高崎にて敵種田を取逃せし事の始終を語りければ魯白に翼息し承えれば其少し心當りあり此程兵庫の津へ一宿し隣座敷に宿りし旅侍士の物語を聞き筑後柳河の城主立花家ふたゝ鎗術の達人兄弟三人新規召抱りし君寵甚だしとの趣き若や種田赤間等より有ざるか一度行て試み給へと云ふ權三郎は勇み立其夜の關口を泊翌朝魯白に列れを告て旅立ちし備後國尾野道より早風三右衛門として中國に双をた大商人疊表千彌等を大坂へ積込来り早風丸と名付し千五百石積の手船に歸りし便船し安治川口より出帆せしは船主は早風の番頭善兵衛其餘船頭一人働だの若者等より諸國の旅人便船せし人数凡三十人餘り乗組して順風に真帆を十分揚波



穩にお駛り出番頭千兩箱をニツ三ツ積たる所お大さやかおる磁石を据  
 て座し便船の人々の口々お己が國々の自慢話におどせしが頃で倦疲れで  
 眠らんとせれど浪の音凄く船中馴ぬ者も眠る事を得ず日暮夜の更折頃  
 船の橋磨灘を過る月白晝の如く河渡り海上の絶景類ひ無れば權三郎  
 は寝られぬ儘舟楫を出て月に仰ぐ夜の景色を眺めおやけに古歌など吟じ居  
 たる折しも曳きくしの掛聲喧まど道來るの察する所海賊おらんと見る中  
 一程おく近寄敷多の賊等船を潜付飛乗く一旅籍を權三郎の父の讐を討ま  
 での大切の命なりと物蔭に隠れ居たるに町人を捕共善兵衛の武士も及  
 ばぬ大丈夫刀を抜く振廻し敷多の賊を寄付を便船したる旅人の戦々慄々  
 たるが此中お高山軍藤太と云る武者修行の者此体を見て飛出命限にお働  
 き賊三人迄切殺せし其身も敷多所の疵を請賊の爲お海中へ投落され最早  
 手立者おはれれば賊の彌々傍若無人は荷物を奪んどむるを慰て權三郎思

ぶ様賊三人迄討れじかど鉄砲一發も打ぬに飛道具のなると覺えたり今や  
 心安じ大勢の人を助けばやと義を見て進む大丈夫物蔭に躡出敷多の賊  
 を相手として左右前後お切散し飛鳥の如く働きつゝ一瞬間に六七人物の  
 見事お切伏たり此時賊の巨魁の元船中居たりじや手下お敗北お堪り得ず  
 此方の船中飛乗るを權三郎に見て可くと笑ひ汝が賊の頭なるか汝敷多の  
 人を惱したる天誅受よと罵りて切込を彼方も心得たりと講流し二打三打  
 打合しが權三郎の故と峯打し小手をまたか拵ければ賊の堪ぬを持たる  
 刀を打落され凄む處を付入て二間をうりも投附し難なく生捕縛めたり  
 又先刻よりの戦ひに小賊共の残らぬ殺さる船中一紙半錢も失はぬ武者修  
 行の外薄疵負たる者もなけれを權三郎を神の如くは敬ひ夫より室の津波  
 着て船に血の付たるを洗ひ清め海賊を退治したる由を訴へ賊首を繩附の  
 儘差出しければ役人引立吟味せしお淡州無宿赤澤十内と云者にて羊未海



賊をなせし旨白状し及び重き罪科し處せらまじしとなり借も早風の番頭善兵衛の權三郎が働きを謝し金百兩を贈りけれ共權三郎の路用も乏しうらむ旅中財多たに却て禍ひ基ありと堅く辭して受ざれば善兵衛の止事を得む金子納め然は此津ふて權三郎を待遇の爲お祝をおさんと船頭始め若者共残らむ長門屋三左衛門として此室の津すて一二を争ふ青樓へ伴ひ面々馴染の妓女もあれば此樓にて大酒宴を設け善美を盡して權三郎を養應し内の暖簾の名を付たる長門と云る魁妓を權三郎の相方と定め番頭を始め各々車座より思ひくく藝盡し或は酒順踊夜の更るまで興ぜし權三郎は素より静なるを好み酒も嗜まざれば殆んど退屈して席に堪む早く長門の部屋へ行けるふ此長門の艶色類ひあま上氣象高く又學問も心を寄ければ一室の座敷俗を離き床の掛物を始め皆風致あり又茶室を設けて釜の沸る音の夜半の時雨を和じ悉く皆權三郎の心よ叶ひ長門も同

人の美男よし温順なる様子に憎らむ思ひく事し實意を願し馴々敷まれど侮がましき振舞無薄茶の手前等も最優しく因て權三郎も傾城の賢なるを始て知大に鬱憤を慰めけり折柄彼方の座敷ふて鉦打鳴し手弱き女の小音にて念佛を唱るゝ然も哀ふぞ聞ける

○室津にて笠野同胞再會の事

并同胞九州へ渡海高田又兵衛ふ對面の事

爾程ふ權三郎の念佛の聲心よ關り渠は何人にて誰が爲し佛名を唱るゝ最衰れに聞ゆるありと問ふ長門の微笑那の御一座の善兵衛どの御馴染明石太夫の引舟八重梅と云稚い子よ去半より此家母奉公一年の行ねと縹緞よく才發者故か客多けきと男を嫌ひて打解々を強て迫る事もあれば腕を捻上などして見掛に奇らむ力の強く男も舌を巻ほどして夫は何時も夜の更る頃那通り念佛を唱ふる事一時ばかり故外の御客の邪魔に成んと叱



けり夜も左右止し山を因り者よと語りて聞權三郎若や我妹梅が匂引き  
 愛居るに非ざるのと思へ胸を打騒ぎ長門が用足じお返は幸ひ聲  
 を知るべし廊下傳ひお行て一間を差覗けば渠の足音に驚き歸じ位牌は袖  
 ふ隠し灯火はソト吹消さんと老る女の案ふ違ひを妹梅をり權三郎は遠  
 て一間に入替へ待て兄權三郎あるぞと聲懸るよ八重梅も驚きて振返り  
 此日来片時忘れぬ兄上かやれ御懐じやと取鍵の時替言築居たり權三  
 郎は嬉し涙拭打拂ひ是も梅其後如何じと此處へは来りしぞ定め難儀を  
 せしおらん委しく語れと問掛られて氣を取直し涙ながら倉澤ある熊手  
 の三次が惡計にて此家に賣れじより口惜くも此里に住み賤しき奉公する  
 事も若や敵の手掛りを聞出さんかと夫を頼み又毎夜御兩親の御向も本  
 の心はありおなじ然共辛の苦を忍び身は汚さぬお妾の云津堪忍じお給を  
 ねと流る涙を止めぬも敢て一伍一付を物語れを權三郎は殆ど感に我身の

上は粗き語り聞せ同胞手に手を取交し四つの袂を繋り折がら此方の  
 襟を明て来る人あるより見返きは是別人なら船長善兵衛より先  
 同胞の再會を祝し餘り蕭然おなりいへを座敷を譲て冷一献淡白と一駈  
 して皆々臥し申さんと彼方へ伴ひ酒肴改めり權三郎は盃をさし御肴を  
 さじ上りて臺に乗せて出を見れば八重梅が筆勢證文をり權三郎是の  
 と驚くと善兵衛の形状を正して權三郎は打對し失禮ながら御兩入様のお  
 咄の始終を立聞直し御身を購ひいり聊か御禮の爲寸意を表する迄なりと  
 云ふも權三郎は善兵衛の厚意を愧び感にお梅も引會せ厚く禮を云せは  
 れば善兵衛は猶お梅に對ひ其御禮は何じ及ぶべし我々始め船頭と御  
 兄君の在きを海賊の爲に討殺され魚の餌食と成おんを御兄君の御働さ  
 れて半紙一枚煮りて一人だも怪我おさのぬか海賊を慶じよなきまじり候  
 ぐ迄の愁ひも御我々の大幸此上おはと權三郎は木勢を相手御働は御



語りおどしむる今宵は皆々眠るけり備夫より兩三日過て船改めも濟されば  
 順風をまつる纜を解き室の津を出帆して猶も船を駛らせつゝ長門國下の  
 關へ着きまは權三郎は早風は番頭善兵衛ふ別れは告是より九州船に乗移  
 り終ふ豊前國小倉に到りけり爰は播州明石の城主小笠原右近將監殿の  
 今より三年前去る寛永九年に此小倉城へ移り住給ふ由權三郎聞知りまは  
 ば必定彼の高田又兵衛も大方に此地に居るあるべし尋ね見んと旅宿にて  
 其様子を聞合するに高田先生は近來宗伯と号まは綾瀬川といふ所は隱居  
 せされ若先生家督ありて名は又兵衛と改めりまは由をりて語るを聞く同  
 胞は大に悦び早速綾瀬川へ尋ね行宗伯に對面しければ宗伯も思ひぬ再會  
 ふ限りなく悦び厚く待遊せしは權三郎は種田が爲に養父を討れ其後上州  
 高崎にて敵に巡會ひの共謀が義弟ある赤間腰野と語る兩人の爲に取遊し  
 此程初聞は彼等兩人は筑後柳河の立花家本公致を由因て是を討ん爲

采りしかりと是迄有じ事共其母語りしは宗伯は其孝義深く感じ又同胞  
 の薄命を嘆息したりけり爰は當家の指南番よて天下に其英名を轟かせた  
 る宮本無三四は當時隱居して閑暇の身おれば常高田の家に来り碁を圍  
 むを樂ととしけるが今日も采りて宗伯乃引合に權三郎と對面し敵討の志  
 一を覆某しも先年敵佐々木岸柳を討し事ありまは語り出夫より武邊の物  
 語は日をも暮しける權三郎若冠と雖も高田宮本は劣らぬ英雄なれば是ぞ  
 玉幡對の俊傑と稱つべし夜ふ入猶打解けて酒宴を催し各位義を語ひしに  
 彼の桃園の古も斯やと思ひやらして頼母敷こそ見えよけり備權三郎が讐  
 討の事を聞し兩人は我々同道して柳河へ赴かんと云けるは權三郎は押止  
 め御兩所乃御志は千万忝なきに共然よて其子が本意は非を讐の虚  
 實試探る間何卒是なる妹お梅を御預り下されたと二三白逗留し其後權  
 三郎一人柳河さして赴きたり



權三郎義胤此處に逗留中高田宗伯より右近將監殿へ義胤の事と申述べ  
 れば元米武邊志操深き若也高田宮本仰せて一家中武術大試合乃  
 一條あれど此の本文に要なれば略して爰に載せ  
 備も笹野權三郎義胤の只一人筑後國柳河母到り鹿無僧の縁を以て當所寺  
 町ある普化宗一心寺に宿を求め住僧に對面し四方八方の物語を以て  
 本母此住僧は元米實義深き又武邊の心掛も有て頼母しく見ゆる母より報  
 響の志操を語り主君の御免状状も見せおとし御當家へ近來召掛られし武  
 道の達人三人有る由其名と御存よと問けまは兄の種田一水軒と云四方  
 髪ふて色黒く丈高く最も異体の先生あり又二人の弟は赤間某腰野某と  
 云由あるが三人共當家の殿の御意に入出頭此上をじと語るを篤と權三郎  
 は聞て備は五郎左衛門めは相違有まると思へど面を見ぬ前は粗忽の事も  
 成難く種々思案を巡らせしが或日一水軒の道場へ行て案内を乞某の作

州津山の者なるが武者修行仕つる母も先生母謁見願ひたしと云入ける  
 此時赤間の代播古致し居しが今日の先生他出なりと執次の者よ云せは  
 是は權三郎の力次第落し大手の掛形よて其歸を待たれ共達ざる故又翌日も  
 道場へ行し今日も留守と答へ其後又々問尋まは病氣と偽り己が面を見  
 せざれど權三郎の来りて當時寺町一心寺に逗留せし由を敏くも聞知て腰  
 野又ハ謀計を授け權三郎を欺討んと巧たり備或夜一心寺に盜賊忍び入  
 りを權三郎の何の苦もなく生捕て何者なるかと貴問ども始めの勿々云ま  
 りしが終に責苦不堪無甚しに當家中の指南番種田一水軒の義弟腰野又ハ  
 と申者我内々心を掛し女を一水軒に取る、事付退引おらぬ金子の及  
 用ある故に當寺の内福と聞て忍び入たりと白状しなれば權三郎の謀計と  
 は夢母も知らぬ宜者入来りぬと打悦び繩を解て勞りつゝ一水軒の素性を  
 聞し高崎の字を破り種田五郎左衛門に相違おければ渠は我父の仇なり



汝導引て我母討せ呉をば何程の金銀をも與ふべしと賺しなれを又八は大  
 お悦び是の有難き事を聞者々あ某し一水軒は怒むれ共一旦兄弟の義を結  
 ひたせば渠と殺さぬ忍びも然るも足下父の仇とあるは種田は天命の盡る  
 期あり必も導き申さんと眞實もやかよ云々る然らばよくせよとて此夜  
 の免しと歸し遣りぬ然るも一夜隔て、又来り幸ひなる所かを明朝の一本軒  
 門弟數多引連同ト装束よく額面奉納の爲當所八幡家へ參詣致さる此時  
 を過し給ふなど告げれば權三郎大母悦び當座の褒美を與へて腰野を返し  
 住僧お斯と語りしお夫悦ばしき事なれど報讐の誠ふ一大事なる高田先  
 生宮本氏おとへ申遣し妹公をも呼寄縁々事を計り給へ過失あらば悔て  
 返らむと諫め共權三郎は頭を振俱ふ天を戴かざる讐を眼前に置かむ心  
 事お係り猶豫致し又も敵を走らせなば何程の時よの本望を達せんと返る  
 を強も止を難く然程お思ひ給む心お任せらるべしとて彼地の紫内供

委細お教へ權三郎の差料の細身ゆゑ先年門田の海にて漁士の綱お掛りな  
 上し無銘の太刀愚僧故有て所持せれど僧家お在て益なき物なり此刀は  
 必も名作と覺ゆ箱根の別當法印が管玉丸は友切丸を饒別せし例も有は是  
 を貴客に進らせん用ひ給ひ本懐なりと取出して與へけるにぞ權三郎は  
 辭するお及びお大いお悦びて押藏さ能々見るお何さま刃文見々として一  
 点の曇りなく實お尋常の刃ならぬは權三郎は彌々勇立腰お帯して曉より  
 一心寺を出八幡宮の社頭にお到り先武連長久を祈り此度本望を遂させ給へ  
 と念いつ、物陰お身を潜め種田の来るを待程辰の中刻とも覺しき頃十  
 七八人一樣にお出立たる野装束の武士深編笠一面を隠し石櫃を登り来る是  
 實にお當立花家の若君清三郎殿母て此日種田も道まで御供せしが奉納の品  
 お失念せし物ありと途中より我家へ引返せしおあり權三郎は腰野の告しを  
 眞實と思ひ種田が門弟ごさんなれ今や名乗て討取んものと目釘を濕して



待の々たり

○權三郎種田が奸計に陥る事

并高田宮本義胤を救ふ事

○權三郎敵種田と討事

并笹野家再興の事

借も權三郎義胤の八幡宮の社内丹身と潜めつ、待處へ十七八人石櫃を登り来るを一兩人遣過じ横合より踊出大音揚是れ紀州和歌山の落中笹野權三郎義胤なり父權大夫の敵種田五郎左衛門尋常ふ勝負せよと呼はりながら刀を抜放し切て廻り忽地近習の侍士三人まで切伏けまを是れ狼藉者適すおと大勢一同丹拔連四方八方より切て掛り若殿の御過ちなき様おと前後と守護する速避るを見て權三郎は此時借の種田の奸計に陥りたるのと始めて悟り申譯せんと思へ共條を亂せる白刃まで最も劇敷戦ひゆま

其間おさま、餘儀なく血刀打振く多勢を合手に切結びたり然ども猛勇無類の壯士なれを聊も手を負を却て近習の士數多切殺して隙を窺ひ脱れんとするを清三郎殿御覽じて綾瀬小五郎龜田新十郎は居を、渠を生捕と差圖ある丹段まりぬと二人の心得奉納有し長刀と鎖鑰を取下し兩人等く立向ふは權三郎這の手強き者共と思ひ彌々秘術を盡して戦ふたり然れども最前より多勢は合手し働さし故今の体疲れ腕弱り過つて石燈籠に刀を打當ければ鏝際より不つきと折差添を抜んとせし間丹綾瀬龜田衛と寄て矢庭に打倒し人々折重りて繩と懸たりたる此時種田一水軒の時分と計して歸り来り若殿の御安泰を祝しなどし夫より權三郎は町奉行黒瀬玄蕃の手渡しし拷問せよと言付たり此黒瀬玄蕃と云は種田が無二の高弟ある故内意を含め置權三郎を責殺さんと巧みもあり然ども權三郎は我身の米歴を奏敷告報響の免狀を證據として辯解し又紀州寮へ問合給へと申立



けき共更は聞入なく證文も猶物なり定めて當家に怨みある廻り者も相違  
 おるまじ若殿の手向ひせし事不届かりとて手荒れ拷問は掛不日責殺さ  
 んとを權三郎は天を仰て嘆息し我斯まで再武運拙く敵の奸計に陥り死せ  
 ん事旦夕あり然を獄中在て死せんより寧ろ立花家一怨有て若殿を害せ  
 んとせし由白状み及び刑罪一行はれんふ如じ然をれを遂一の紀州家の御  
 聽し心達し立花家一祟り有は必定なり是を冥土の思出せんと心決し  
 其し實は大阪方其餘類して主家を亡され無念骨髄み徹すまは吾の豫護の  
 例に倣ひ刺客となりし事果さるるに殘念なりと白状みすまは然も有  
 んとて口書み捺印取爰は罪科極りければ城外の仕置場三本松原の庚申  
 堂にて刑み行たる事一定めたり嗚呼今日如何なる惡日ぞや孝養万人  
 一勝きたる笠野權三郎も天乃時至らむ父の警眼前在るが討事能はむ  
 却て潔が奸謀に陥り身の薄命を嘆息して死を極めたる勇士の心中哀れと

云も愚かり爰は綾瀬龜田の兩人の心ある者なれば權三郎が冤罪を察し黒  
 瀬玄蕃も對面し後日紀州家より咎も存む御家の爲お惡かりおん能御思業  
 もあるべしと云と玄蕃は打笑ひ是は無益の御差出口なるも一越度と有る  
 らは某し切腹仕ると更し取合氣色なく己其日と成れば權三郎を獄屋  
 より出して城下乃町々を引廻し三本松原に連行黒瀬玄蕃を始め數多の役  
 人嚴重に警固あし頻て權三郎を水の上に登せ獄卒は素鎧を扼き念佛せよ  
 と罵つて鎧の總糸を眼の前で閃かし義勇無備の壯士惡人の奸計に陥り大  
 罪に處せしるゝとい知らぬ數多の見物も人品骨柄秀たるを見て落涙せぬ  
 者を一稍權三郎の脇腹へ鎧を付られんとせし時群集乃中を押分て矢来の  
 内へ飛入者あり諸人駭き是を見れば髪は切下身の丈長く菅蒲草の裁付袴  
 身輕の出立みて大音ふ某子の豊前小倉の藩中高田宗伯あり我義母因て孝  
 子の冤罪扶助ると呼りながら一刀を抜放して走り廻り獄卒下役人と手當



り次第に斬散を以て此時妹お梅も續き入宗伯の後尾で是を助くみぞ黒瀬  
 女藩の太い玉燈り起り狼藉者生捕せ下知をなす機又後の矢来を飛越して跳  
 入る一人の虚無僧天蓋を捜り捨我り羽州の浪人關口魯伯あり笠野が冤罪  
 を救ふ事つゝ權三郎の繩と解お梅を呼ひ介抱させ其身の宗伯を取けて  
 組子等を四方八方へ斬散す不敵の膽勇お酷吏等碎身以敢て一人も近よる  
 者なし折れり城下の夜より駿馬を鞭打て矢を射る如く馳来り大音の聲  
 野權三郎の死刑暫く待へし君命ありを呼ばりお梅ら入来るを誰人ならん  
 と是を見かたは猶家馬術の指南番向井藏人あり隨へ来り組子等以下知上  
 て黒瀬玄蕃を取降せ君命あり因り其夜吟味被筋ありと繩を掛權三郎と駕籠  
 に乗せ高田關口お梅を引連城中心に歸りけり是より前組子數多お宗伯  
 の種田一水軒お生捕せらる押々權三郎が一命危き時に至り高田宗伯  
 お梅關口魯伯三人刑場を切かり權三郎を救ひし如何成る仔細と尋る

先よ一心寺の住僧權三郎が捕われとあり入牢せし由を聞傳へ早駕籠にて  
 豊前小倉お赴き高田の隱宅を尋ね宗伯の對面して義胤事敵の誹謗の語  
 し始め終りを告ぐれば這り捨置難き一大事と官本は談合し願へ言上  
 急ぎお梅を伴おひ三人の早駕籠にて晝夜を別れ柳河へ来りしに豈圖らん  
 や今日權三郎死刑の處せらるゝと聞官本の直に城中へ赴け家老立花三彌  
 一對面し權三郎の紀州の藩中一終まなく報讐危状を所持せし事を演舌  
 及びたり因て家老三彌お驚き取者も取敢を殿へ言上するお領主の外の  
 一驚き給ひ向井藏人お仰て先權三郎の死刑を止るべき此と同時に組子  
 下知して種田と黒瀬を生捕せられたり又宗伯お梅の刑場へ飛入り酷吏等  
 は追散して權三郎を救ふ機彼の關口魯伯の来り助け給はる渠大坂まで權三  
 郎一別れ和泉國まで到りしが義胤の後を遠九州へ渡り森合お梅お機好  
 も此場に臨みおあり賢遅らむ早からむ不思議お危死命を救はる是天



孝子を助け給ひしからん然ば笹野を始め高田關口宮本并にお梅の各々城中に止め置れ猶紀州家へ聞合せとて向井藏人使者并立和歌山表へ立越て笹野種田の素性を尋ぬるも權三郎の宮本等が申處に聊の相違なきに直様立歸りて殿へ言上をせしは殿の大い母怒らせ給ひ種田と拷問に掛られけきば舊惡残らむ白状し及びたて因て權三郎の管創療治し筋骨健全ふ成し上城外の空地に於て親の讐を討べしと仰出され綾瀬小五郎龜田新十郎兩人此役儀を承り紀州家へ又々使者を遣されしうべ則ち讐報見届しと松井新八郎罷越たり時寛永十一年秋八月廿一日と以て報讐と定を綾瀬龜田の兩人の組子に下知し城外南の馬場一百間四方の竹矢來を結廻し正面の棧敷と掛南北の矢倉を組上矢來の中一砂を敷き勝負の場所とせられたり時母當日をなりけれむ豫て此沙汰速近母隠れなく聞え殊に此日の晴天朗々ゆゑ未明より見物の貴賤麻稻竹草の如く引も切を南

の馬場ふ群集して矢來の四方に充々たり備又矢來の中一段高き棧敷の當城主の公達立花清三郎殿紫の幕を打せ陣羽織を着し軍扇を持って出座ある近習の侍士四五十人左右母居流れ又西の棧敷ふ紀州家の檢使松井新八郎野袴に前黄羅紗の陣羽織にて着座せり東の棧敷に當家の家老用人目付役其外の諸役人思くの装束ふて巍々堂々として居並ける備又正面の棧敷の前一の當家の檢視役山口主膳銀の采配把て床几母く、り内外の櫓の角一の物頭四人足輕八十人皆棒を持って非常を戒め嚴重に警固せり此時南の櫓にて太鼓と打鳴せば須や始るぞと我もくと押合へし合棧敷も櫓も一同勝負の場所を詠め居る斯る折るら種田五郎左衛門南乃口より入来る其出立一の白き單衣ふ白た帯を締柿色の野袴は穿ち白き鉢巻して二字國後の二尺八寸餘の有たるを帯し悠然として歩行寄面魂今年積りて四十一歳脊高く骨太く眼大きく色倦まで黒し何さま一癖あるべき形骸を



り斯て種田の中央の砂の上敷ありじ圓座に著相人の來じく楸中并苦味  
 られて身体勞れ何程の事有んと思ひ居たる折から笠野同胞の北の口より  
 入来るに先權三郎の出立の下に白の袷衣を着勝色の裁着をはき白練の鉢  
 巻し二尺五寸正宗の刀を横たへ妹お梅の白綾の單衣に同じ帯を締白練の  
 鉢巻して紫縮緬の玉禱をかき白柄の長刀小脇に抱込權三郎が後より續たり  
 遠後より高田宗伯官本無三四關口魯白入来り此三人の床几並にりて  
 たり權三郎妹お梅も種田と同じ砂の上敷ありじ圓座に座を（是より双  
 方へ白木の臺おて湯漬おと賜り敵討の古式種々有と雖も種田は種田五郎左  
 衛門が如き卑怯未練の人非人お今更言葉を費をも無益な事じ我怒み乃一  
 言を聞せん近く進みと耳を澄ませば過よじ半我議論に負いと遺恨と思ひ  
 紀野川堤おて我を聞討しせんど巧も事成を屋敷を逐電るに其後老体

ある父權太夫を卑怯も欺討しし名を變と跡を暗せしも今に至る五年天  
 運漸く循環し汝を討事を得たり今に遁れぬ天の冥罰汝母出て汝も  
 歸る怨みの刃受取れと言葉烈しく言放つや否や正宗の一刀を引抜詰寄り  
 種田の問答の違ふは是も大刀を閃めたり左を討は右と交し右と討は左へ  
 聞き一往一來虚々實々秘術を盡して戦ふ体刃の光りの電光石火暫時が程  
 の挑ししが武術の達人殊に孝義勇敢千万人に勝るなる笠野の事か適ふべ  
 き種田の太刀先四度路より浅手四五箇所負毛くと元より強氣の五郎左  
 衛門茲を先達と戦ふたり權三郎の心の内に斯る無道の痴漢を只一討し  
 くの氣味宜かちを弄殺しになきんをと聲のみ烈しく懸るがら暫く對戦居  
 たりしが充分相手の勞れを見濟し頓て一聲叫ぶと共に討込太刀の種田  
 の弓手を斬落し獲む處を着入て馬手の腕を討落しお梅掛れと呼び返り  
 梅の長刀取直し父公の敵思ひ知と胸先深く刺付られカント仰向ふ反返り





後へ撞と倒きたり此時までも清三郎殿始め常家の諸役人勝負如何と手に  
 汗を擱り固驛を吞て見物有るが今種田乃倒るゝを見て機敷を初め諸人一  
 度も動と手を拍賞稱へる聲山川は訝して半時ばかり止せりけり若梅は  
 徐に止めを刺は権三郎は近寄で首掻落し兩人機敷に向つて跪蹲一禮を  
 若殿初め紀州家の檢使并諸士の面々ふ至るまで同胞の働さを深く感  
 づ一同城中へ引取りさり茲に至つて権三郎お梅の同胞の多年の本望を達  
 し喜悅事限りなく亡父の位牌を出して首と手向夫より高田宗伯官本無三  
 四鬮口魯白もろとも諸役人に警固とさせ徐々と歸り行舟路次の見物口々  
 権三郎お梅の孝義を譽稱へ誠ふ前代未聞の報讐と感せぬ者こそあがり  
 けれ其後登野向肥并高田官本關口等一同領主の御前へ召出され酒肴を  
 賜ひ加之高田官本の御褒美をして金子衣服等數多下され小倉へ送り歸さ  
 れけり諸又紀州家の檢使松井新八郎へお家老立花三彌附添ひ和歌山へ立



越え首尾よく報復相濟を段申上權三郎を當家へ給ひたしと懸切し申入  
 られけき大納言殿御聞濟有りて權三郎は立花家へ向ふられしは新地  
 五百石にて一家中鎗の指南番となりお梅は本國紀州に歸り父の高弟を養  
 子とし其家をたて、是より笹野兩家となり子孫繁昌おしよけり備また  
 黒瀬玄蕃の惡ふくも孝子と依せし罪ふて切腹申付けらる立花三彌向井  
 藏人の兩人は加増發瀬龜田の御夜詞を蒙る次一心中住僧は此度權三郎  
 扶助を奇特に依りて寺領二十石寄附せらる先小權三郎も送りた力無  
 銘の村正まで罪なき人を害し權三郎も不思議の災ひに罹りたり關口傳伯  
 は當立花家へ仕官致をべしと勧められしかども堅く辭し其後柳河を立賊  
 幸左衛門を捕へ主家の寶を取返し奥州に歸りけり又種田の義弟腰野又ハ  
 ハ八幡宮の社前ふて權三郎の爲に疵を受獄中母で死を赤間東左衛門に逐  
 電して行方知ます扱又倉澤ある熊手三次醫師玄石等の舊惡巻々と露見し

領主の手へ捕れて刑せられたり爰は播州上月の佐布里左内の權三郎が復  
 讐の始末を聞傳へ殿へ數日の暇を願ひ濱田六郎左衛門同道にて柳河へ求  
 り權三郎の對面し先年の厚義を謝し目出度本望遂しを祝し其後娘花女を  
 笹野母送りければ孝義稀なる美男子ふ貞操類なき美婦人と真に一對の夫  
 婦ぞと羨まざる者なかりたる



明治十九年二月廿五日出版御届

同 年五月 日刻 成

全 年九月廿五日 日刻 製本御届 成

全 年十一月 日刻 成

編輯人

不詳  
菊町區飯田町二丁目五十四番地

水野 幾太郎

同所

榮 泉 堂

版 元

本石町

上 田 屋

大

横山町

辻 岡 文 助

賣

南鍋町

免 屋 誠

定價金四拾錢



